

武徳成業

從二十一  
至二十七  
四

庫文閣内	
一五函	二〇號
五架	三〇冊
	和書類

内閣文庫	
番號	和 2030
冊數	13( 3 )
函號	150 13



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



武徳成業卷之二十一

明良洪範

永井直勝傳八郎后右近太夫卜号三州大濱村ノ

社家長田某力一子卜力ヤ 神君近仕スル所

ニ長田ハ源家ニ近召仕レ難名字也改ヘシトノ

仰ニテ永井卜改ム永井ハ勝入力首取武功世ニ

隠レ無其所以ハ勝入力首ヲ持引返ス所ニ

神君御賢有テ傳ハハ高名セシヨ十卜仰ラレケ

レハサレ候此首ハ安藤彦兵衛某ニ首取テ御目

ニ掛ヨ近突捨進故ニ首取來候由有体ニ申ケ



ルヲ彦兵衛ハ聊采知進菟テ池田紀伊守之助力  
首取テ實檢ノ沙汰ニ及シ時ニ彦兵衛申ケルハ  
先刻池田勝入カト見ヘタル者ヲ若士即刻鎗付  
討取タル武者振比類無働ニ相見ヘタリ開シク  
故誰某トハ美モ不屈某始鎗ハ突タルト存レ氏  
家臣トヲホシキ者突掛火ノ粉防ニ一鎗致タル  
ト手覺迄若武者ノ脇詰少拂紀伊守ヲモ討取タ  
リト申サレケルニソ直勝力實儀モ頭レ彦兵衛  
力志取々感シケリ勝入カ首持セ直勝ニ副使ヲ  
指添織田信雄ノ陣ヘ遣ル處ニ勝入帯ル取ノ筈

ノ雪ト云重代ノ関和泉守兼定ト云直勝ニ賜ル  
右ノ其節着ル取ノ具足モ永井ノ家ニ持傳ルト  
云池田輝政 神君ノ駕ニ御成父勝入ヲ討タ  
ル永井傳八トヤラシ床鋪候面話可申トアル故  
出サレ、處ニサテ傳八身上ハ尋ラル老臣ノ内  
ヨリ十石申付タル由御挨拶申ケレハ輝政不興  
氣ニテ勝入カ首殊ノ外少身ニコソト有シヨリ  
即時ニ御加恩ノ沙汰セラレト也関ヶ原御利  
運ノ后早速幽齋<sup>江細川</sup>公方ノ法式習ニ遣レ  
當將軍家ノ御作法潤色ノ撰ニ逢タル人也福嶋



正則改易ノ時備後上使寂上源五郎身上引拂ノ  
第ニ遣サレ出羽ノ仕置仰付ラレ本多上野又由  
利へ配流ノ第ニ直勝其更シ司ケル皆上ノ思召  
ニ叶タル執行ノ由御感有ト也

拍寄物語 神君首実揆在任水野惣清なる事ト山樞ノ沙門五

九日登時ノ

翁物語 同意の物語ヨ 家康公の此門ヨ言升助ニ命トシ

侍有り而来水原家の者ノ長久子合戦ノ人ニ或給  
と合又ハ姓根成諸首領西行殿ニ相成於ける中ノ  
右乃言升助改年行志の事にも亦在

家康公の御前ヨ系リ今度人々行志ヨ事ハ不遂者  
ナリ某々人々此ノ事ニ面目ナリ此中ニ中洞流  
トシ此ハ 家康公此時迄ニ方事ハ此ニ遂行  
此ニ遂行ヨ者ナリ我秘病ヨ只ニ此子細ハ此際  
對シテ此ノ在源ヨリ一左衛門ノ人々在付スル  
者々在少一首ト云々此等ノ事ハ亦此ノ事ト  
宣ハ此ノ助次席面目を能ク諸人モ助次席取志乃  
深キ者ト沙汰ナリ

按らん此乃の人或控ありたる事 かくこそ其物語ナ  
きこと付 家康公の此網の再席取時ノ感懐せざる







ト申上ラレ候

此事ヲ水野惣兵衛申上ラレタリト異説アリ

非也

老人雜話

小牧河の時先年分馬を出されよと云來るを固を時伏  
見よそ利休の茶の會の産よ河り流路を出て雁をよ

くり書やるひといつて書居しりよ

柏崎物語

甲貝と吹うせ二重橋の方澄く小牧と酒井石川伯督本  
多平八石川左衛門と文辰平八傳てあの太軍より書居  
河〜の太事とと相見えり〜り概今年とを以今年  
相見合ゆり三好人救切居これ秀吉も今出高の申す

平八傳と外意とのむ左馬尉は中へ返に三辰振り〜羽  
悪樂田の方と権討よは〜〜と中時石川伯督秀吉  
志と通する友史の甚河〜秀吉八方の人救と云秀  
吉はあつたよ為十方もある〜〜と附入よ〜と  
志と事〜よつて左馬と権討の成り〜と云左馬尉  
是は御時胸〜〜〜の事〜〜と云平八石川  
い石川酒井い中〜と云左馬尉の御〜と云  
子成〜い不成太事と〜と云伯督の御〜と云  
事〜付〜と云不成と〜と云平八版と云元来  
胸〜と云我亦い思〜と云

殿極の



水軍を成りし人救出を遂げしに其の角も成  
いしと礼ししに其の角も大軍の勢もあつた何れも二軍  
の先を先達と見居討死を遂げしに其の角も成  
後と其の中口極し其の角も成し石川左衛門を其の角も成  
る所の仁也物平八百左衛門を其の角も成し八百の角も成  
及よりモトに川と云川有る泉も山隈に流るは其の角も成  
流れある泉も川と云川有る泉も山隈に流るは其の角も成  
系人救出を遂げしに其の角も成し其の角も成し其の角も成  
是れ見んて是れ大事に命合預り合戦せしに其の角も成  
りしに其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成

角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
を其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
小拍見よある今秀吉を其の角も成し其の角も成し其の角も成  
信今戦し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
お怒る川幅舟も其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
の人を其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
とけりあれい大膽なる者之を見知りしに其の角も成し其の角も成  
福系一旗其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
平八とて中秀吉を其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成  
を其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成し其の角も成



只小頼母安考之平八或討之其據少なりと云平八月一日向據  
押り此中此平八方へも其據同し一極は押り此れ秀吉  
人殺之る事少く此の平八川のありたり友仕方は  
只此中と此案し一此中と方勢為人平來る事少く其據  
此中と此極子ふ此案し一此中と此極子川より馬の足  
洗りせ居る室下屋敷の極子へ秀吉の通りを見物し  
居る秀吉は此中行と決し一大勇と感 神君  
小橋へ此川より此極子の方親軍の續見たりと云此後  
此節は此先子の大功之人を討死せる事少く其方と云  
靜は此川入此案平八此案し一此中と此極子見事

此勝軍より小橋へ此入此案し一平八此後此極子此案  
見事此極子の此軍少く此中此小見限此後此極子  
此中と云此 神君上意小事を了しは後此極子  
方を小橋し此一此中易く軍を討つ事と云此方此後  
此後此小橋の城へ此極子此極子入

感狀記

後忠勝此事ヲツタへ聞テ秀吉ト共ニ鋒ヲ争へ  
キニ非ス然レ我ヲ討ントナラハ大軍ヲ引受三  
度モ四度モ衝部ケセリ合時ヲウツスヘシ其間  
ニハ先ノ合戦已ニヲハリテ秀吉後至ルトモ利  
ナカラシ吾是ヲ慮ルカ故ナリト云リ忠義勇烈



兩十カラ備リタル人ナレハ 源君ノ恩遇他

ニコトナルモ理リ也ト覺タリ

柏崎物語

秀吉の基跡云々は在腹を之勝入り其く云ひ一に二の  
目の軍仕ふくくしく齒を喰ふりり其念り物く小  
備くの押忍くくく人殺も追く来る稲葉一鉄細川陣  
達而陣云用喚京よ及びゆとある友物くいかくく  
居くくくくくめ申と申中柏木のカ之上田中と申あ  
出入り申す付申す人馬の息を止め明細ありて人殺  
どうけあ将とて討くくく石のかと上村の田中と云ふ令申  
落穂集  
雲武秀吉後一戦の初討死と云く後い様はお知りぬとも甚

名と指くく者云くく

御前と初出陣申す

何事にも不慮仕はる事本屋常貞と申研作上方者少く申  
本は淡路にお借右陣陣の首流佐仕小技出陣備は在る  
と云ふか云方後と上方小籠て雲武秀吉のいお入在る  
と申尋は程は場を成程後御考及くも以前は人あく  
お入仕りて申す付物くく被取の及具たとも目見  
在るおいと流路は程は及方のは具の後い見是程在  
いと申す付物を先以て一戦の初ら取仕る口服者の中  
くく廣くの指料くくくくく存程成と云ふい若お  
振うくは福く付扱多お集りゆと常貞よは見せは程後



よを申よて口振る二腰見ふけりる哉意及指料よ  
終之世社に首中よるよ月を及具の虫所を以て味は作付  
此のく形よおまへ八種と附札方よよ月八種と注出其  
場の手首尾を以てすせり捨れ八公秀中よるよ八歌傳中より  
武者一騎同智と歌よて宗制一交うこと絶なりりりら  
御胞よ南りて馬の尻より池邊首と云れと中よ月御  
首といふ後一たやや少有りよ月八種中より右の首とよ  
此語をく持来てはと云ふよよ月八種中より右の首とよ  
有り月八種及傷の敷の中へ控へて中よ月八種と云ふよ  
まよ一書記付死と方よ付死は此田父子の控へて是傳  
後へつる後よは此書首持来て此河の子細今一應八種  
事是を兼座の中よと注お伝はよ 家康公此書を控  
書記付死と有い傳はいも形くそ首を八種り控へる  
と中よ月八種とよ事漸た此傳より委細の傳をお記よ  
ふ及て作をよとよと御前向まお傳は得る傳傳申よ於て  
とよ下の名沙法不宣中よも八種傳折角よる首八種歌  
方よ兼い此此と風流りるよよ八種傳く時よて二書は此  
次第と名極免りや蟹江の傳傳政よせ捨るれは別理ふ  
そに歌傳をくをよとよと捨胞山河より死果は也  
左圖社合我の以後世傳の我い我伝傳より大ねて人付死

老人雜話



先づいふも首と云ふ事敢言し 家康を自身戦ひ

我之動はと宣ふと我或人云勝入討是れをさし合戦し

て勝て後又彼軍しと士卒減失し連て一人悔ふと云

付れしと我

指詰の語

小幡しと平八の法城守の口張信雄より移る相平八物見

と我の三浦九左衛門次郎多勝牧宗江所山野田吉原所

向坂支左衛門松田勘右衛門と云外追て出る自分も物より

は余小幡より三浦水守と十七町と少長し一時山野田

小幡の語 記す所の事なり

吉原所馬被り吉原所馬被り馬の三浦水守の方より

吉原所追欠り平八吉原所は怪敵とすめ能く事と云付

高切て余抜り討て行り多強と餘の石実とて押取り

破る等の多強と石実とてとめる大口の相平八山野田と

清原中八山子前と云心有河原加勢しとて後我もと

左衛門を主人殺しとて八百有加勢は強は今我敵討しと

上り勢と餘の石実しと云後程む之強は山野田と云

清原八系し右の法城守と平八二の見は仕敵の事と云

と云はたたりと云山野田の内は秀吉の首級と討ちと云

と云討ちと云是は後程むと云勝は脇と手を取ぬもの

先今略を此軍は山野田しと云後程む止し後程

高橋集

吉原所退か石実は山野田と云後程むと云後程む付と云



豊後守立海り沛前小部系れはをそ方敵の門に  
誰しも河れ門をくそそ人あまうそ昔人も  
一歩く中身くそそ

指物物語

時、立泉寺より人教を御りて云て山腰の山人教  
神君の御りて合点のふ事事と此後君臣友系  
相見の御りて七所兵一人系切て行敵方もあま  
さ事くそ強く取會秋も多く敵の陣中へ系  
也一存ふ小思て海り云と中へ敵は方へ系  
飯食と志くめて在在否今秋者勝りて明日朝  
も中御りて中上りをそはお後有る所へ

上り

落穂集

史より方もれ沛湯漬と此上追討御馬と此  
官隊分隊後小部人教を捕くそ中名在御りて  
敵陣への水働たそと備人獲りの事れ小部  
沛馬成はる入中と

感状記

長久手ノ役ニ 源君討勝タマハ秀吉ノ師

ヲソルハ色アリ秀吉衆ヲ督ヒテ出テ戦ニト勇  
メ立ラレケレハ衆奮激ノ氣ヲ生ス 源君ノ  
兵秀吉ノ目ニ餘ル大軍ヲ見テ驚キタル體アリ  
源君明日軍中ニ令ニテ馬揃ヲシタマハ味方



歎ヲ吞ノ心ヲヲコス良將ノ為トコロ知レヌヘ

二

柏崎物語

秀吉の田中

一門拂は成りしと破城野尻前介細川義春

中付く門拂は中三郎吉山親善堂と焼上是を明松小

一と門拂は後何そ欲有山や細川と卷中は秀吉ハ小幡

山崎正成と不知朝延と三三掛と法政時小物見事と小幡と

いふ山門拂は成りし中秀吉多と打て秀妙人教と扱

いふ中と六高れと是程とと六不知神のト一は方の夜

不と行と法一御一と人教と栗田の方一山門拂は

了凡左邊の尉栗田の秀吉の陳屋と焼忠義の働之秀吉

も陳屋とと法焼強御法被

神林被前四首首二の五津慶長也

は心後思ふ小叶いしんもふ成内意と遊り 御五郎と

制て被方世方を歩り宇治より竹唐と名と智茶

師も成大小各一葉と法徳教の松子と法を仕る

宇治の所代友法信竹唐の園ヶ京の時分大官曲梅と

付死也

初代の山田十美討死二代目いけあき退園ヶ京の時分上

杉小幡の山田切而左邊長井善兵衛浪人も山田切也

後歩保長利誓一とやだ仁一生 御家一と梅は時分忠軍



法と被り改易を伴う後には近江の御前を名乗  
のさく刀をもち出る所の元人殺すて貰ふ  
四月九日の夜小坂の山崎に秀吉方軍仕少く一騎入子  
由秀亦は討取らるるに及れど一騎一隊と云ふ事  
池田右衛門勝入に伴う討死の子を討て得る一騎と云ふ事  
馬の口と云ふ此之用と云ふは此の伴と云ふ後事なり  
勢別軍の城信雄の弟末徳之方、徳河尾別へ向りける長久  
寺の利運より来て得る一騎、此の浦生衆の坂原常  
軍の城、徳尚十百より攻り取らるる尾張へ向る信雄、千村  
加賀の井へ加勢す

秀吉源對陣より示す一騎、羽忠の信を交す  
一騎、此の中村、尾崎、山内、権右衛門、伴、赤、掃、敏、次、誠  
將忠一寺、一並、羽忠より西十、言、田、と、云、所、稻、葉、彦、六  
長谷川、友、五、郎、能、行、友、五、郎、と、云、重、秀、を、い、山、和、と、云、所、は  
た、む、ろ、方、を、い、と、十、日、新、田、を、取、り、中、村、秀、吉、を、取、り、樂、田、小  
長、の、軍、を、と、云、大、切、に、被、取、の、方、二、万、六、千、余、を、取、り  
い、自、己、の、口、より、小、長、の、

羽忠を口捕らるる事、一騎、一騎、入  
柳田、鬼、丸、大、割、の、口、を、月、山、の、口、を、大、守、有、り、と、云、以  
戴、仕、を、口、捕、ら、る、事、井、原、を、取、り、口、捕、中、に、て、風、白、中、上



予く其の事一を言ひて上言めて予建する所と出原の如  
く是る言の内

先うけて其を教らるるの如く其の事一を言ひて上言めて予建する所と出原の如  
く是る言の内

秀吉が海防隊及びその出陣

武徳大成

秀吉羽黒ノ旧墨ヲ築テ堀尾茂助山内伊右衛門  
伊藤掃部ヲシテ是ヲ守ラシメ且小城十余ヶ所  
ヲ築キ小牧ノ備ヲ成ス頃日柳原或部太輔康政  
樂田ノ陣所へ書ヲ傳テ曰秀吉君恩知ラズ織田  
信雄ト兵ヲ構工惡逆不道ノ甚シキ誰カ是ヲニ

クマサランヤ諸將群士ナレシ義ヲ忘レテ不義  
ノ秀吉ニ與ニ從フヤ秀吉是ヲ聞テ大ニ怒テ曰  
康政カ首ヲ切テ我心ヲ快クスルモノアラハ賞  
祿共請フ処ニ任スヘシ

柏崎物語

秀吉の爲めに家初を滅亡と亡一天下とを度り其之  
は頂朝解へヤストシと使うて其の朝解へ

神宮皇宮の事日布へ首と渡す只今へ行か海へ也  
秀吉が海へして其の事一を言ひて上言めて予建する所と出原の如  
く是る言の内

昭氏の仁と治る所へ在る事と此中送首へ候ハ申上



知中へ不取合ある度使ときし日あり三ツキと送り  
と中戦後く打挂置るを何とせしは思は懐きありし  
日本方引て只九束の是は懐きと是利の時ハ明の時  
日あり八懐石集振りて引中戦先左振の振子にけり  
右中送り送る候へ不取中戦と

宗對馬守智徳と高と附り又は自結と附り是は高の  
宗流とて先ハ朝敵の方へ入込んで商人多く来る朝敵  
一軍八里とて十八里中もあがり一軍を臺置する自結  
と高の目的程なるなりとて入結も門程敵軍の中へつとれ  
大急となり御籠を御見

山形より十町中小布山村と云ふ所は岩倉御所のより勝勢極  
け無きと敵方御忠より此御所を宗二方此後月秀を方と  
押合對陣するより代りしを布代り合は二首佐藤今之御所  
此方前の山人敷とある方二万八千の山人敷十六徳兵井五徳  
井伴三郎御先備二重徳の方へ巡りたりし軍を我々山人敷  
と此御所を備せあると御徳久を御徳居りあるとらる居  
おと御柵をへ人敷とあり打寄て居る井伴海井の人敷  
も軍を我々居る取寄て居る御備生居るをへあり  
山人敷と此御所へ山形二万平也未破て付けし之較と  
中を以て秀を御あてし

家康お馬の振子といふと



此中いよ甚極子よふれし一と申物一いれん及  
 家産出馬の極子一いれし中せし物と申し一とて居  
 井伴酒井と 神君の中よる柵布一人極と申し  
 中よる上意よ秀吉出馬の極子一馬を一いれし馬と申  
 候と申作は出れ一丈ゆへ久し金銀合て居る此下知  
 有く此人教頭事と申れし柵は秀吉方も口時よし柵  
 此方誓へ長え馬の極子一馬中一いれし一と申し  
 此よに此人極と申し事治し此物極有秀吉方中  
 二事極一十六極と申し時柵とて破事なるれ何友  
 左極と申し一と申し 神君此後い徳徳ふる此馬の極  
 馬あり一と申し一の勝負候て候と申し此物極有秀吉方中  
 て極も名付い不思候之我も此馬有は打てて候と申  
 此と申し中い也  
 け此軍次山積十部左衛門守の介を極受らう一け此軍  
 信雄々の此極信長の此極と申し此中此事一又極の  
 此事方一と申し此極此極と申し又後年一此某け此軍と  
 此物中よる秀吉の天の由一と申し此物極と申し  
 と云甚極人教頭十倍の大軍一極一此味方い此極  
 信雄の此極一と申し一此中甚上此中一と申し一  
 此と申し極もなる此極と申し也



夏物語

安藤帶刀長久手ニテ七度ノ功名有帶刀一代ニ

善惡ノ二言外不言

柏崎物語

廿百山藤氏政氏並より使者長久手此利運の此程候中より

松平因防守之程橋の城小居る市橋娘候も亦を思出候

系上仕付竹右衛門の此程の勇ケキ限りもなき者之名宗の

元次御前入なり時、此政と不和して後、此政

と退く、此政の因防守の趣願解之申一の此政を因防守

と臨みより、元次又因防守の趣を申し、随分の忠告

此政と不和して因防守を断ると立のく、後、因防守

候も二万石より、此政と上意有きとも、因防守

と此政中と此政の因防守料とを申し、是の市橋

の松平治部守備の娘の腹、此政と申すは、三月、因防守

に申すは、是二夜目の因防守、此政

町新吾右衛門、酒尾、此政、竹右衛門、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政

此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政、此政



も支那のそこの有令くは勝利たふしと中よる由事未  
この者こそを味いしときよく中よると皆終る元次一云  
よる由味方徳軍の氣を勇む本根軍よる由神意有るは  
作身にしてさるる

信雄の持分伴勢松を誘ふ徳川二節書居 神意より腹切  
鬼半を誘ふは此洲よる方勢四日修政の由能防一を攻  
めくも其意を人申さるは扱ひを入る故を治せしは故中  
言糧は固り徳は解海といふ陸は海ありとこの海舟を世  
と我位をいふともよる方勢攻めくむゆは故程とあは別  
あよるは終絶をあらり數万の敵とよるは合て尾港へ

ゆる日並大膳大勇有る大膳中身嚴密及防友よる方勢せ  
めあふと右へ通也後大膳を信雄の由費ひは故ゆとさる  
伴勢者一つ甲しききなりは又友は戸よ伴勢者多し  
團風うた振なりは武士はさるあふしを中実出は海も  
扱をせぬゆよする願ふとさるは人もふらぬ振する  
又友自死と能者有りは本根在也も勝色するも有る大膳も  
之類の者有は貴らぬは此之程に信雄の事

家康公岩淵信雄徳川の御城より或は敵軍中へ御尋よ先年長  
久し一戦の刻我亦小勢とゆき秀次の大軍の位を退る  
一戦とさるけ水野島に拂ふ大攻勢中多ふる働を二万



乃小款軍を我部一結交秀吉秘意の侍大將忠臣  
池田勝入父子と討取て其首首を見ても其の  
内安部師兵衛も亦て其とけり一は信て予く山腰の城を  
入る所小款のとうく秀吉味方敗軍を討つて大に怒り速  
刻樂田と打ちまじり詔泉も亦も其のとうくも我部山腰  
一河より一河を是れ取らるる我部山腰の城を我部  
山腰の城を奪んとす用之被りこれとて其の取方なりと  
候より秀吉の陣へ物見とてけしきを伺ふ小款二万  
餘の軍勢小志りと志し我部山腰も亦も其のとうく我  
勝は陸取極る夜我部も亦も其のとうく小款軍小は御り  
竹のとうくも亦も其のとうく小款軍を討つて其の  
家康も亦も其のとうく小款軍を討つて其の  
け退き山腰の城をとりて其のとうく小款軍を討つて  
家中の面々を沙汰せしめ其のとうく小款軍を討つて  
り又も其のとうく小款軍を討つて其のとうく小款軍を  
山腰小款軍を討つて其のとうく小款軍を討つて其の  
山腰小款軍を討つて其のとうく小款軍を討つて其の  
山腰小款軍を討つて其のとうく小款軍を討つて其の  
の勝りとの為は山腰のとうく小款軍を討つて其の  
ては松より有て我部山腰を討つて其のとうく小款軍を



一ノ人殺と一騎ものこゝに討取とも秀吉と中人と討  
淺赤裸とともと方一也せしんり 家康の方の  
直う〜に去程は長久の合戦小栗沈田父子二人討  
討捕とて指しとも能物とて思ひ〜とと法作らるゝ  
家康公或時沙家老中（此時）者小僧ニテ条と云事誠  
心ゆゑやと作〜り〜何と終るなり〜後も〜前代と  
沙徳なり 家康公なり〜味とて沙徳有り宮に  
出家里より去人の中子と名向小僧〜して正徳小  
は小僧有討逐けり親の元へ帰り中より我事加振  
よ政と名めり〜何とて此の回とも勅め御家とて中  
〜あり〜今と〜随分と堪忍を度〜と〜佛道悟得り  
〜理如事斗中お擲被りれり〜云親の元へ支那小建  
後と〜名板の事とも〜と〜小僧善と云常〜少  
〜も是こそ〜あり〜中〜  
建徳如事斗ニテ条これあり〜佛道悟得り判り  
〜と判せ〜り〜我事判留事友討〜判口の先  
の入りも〜り〜血な〜と〜大さなせり〜  
二よ〜味情を擲振る悪友と〜期々お擲被り〜  
用とた〜よ〜又智徳〜曲事〜せり〜  
中〜押〜後〜翌〜一日と勅り中物〜と〜云



親も味方左様の事にもよくわかれ方存ありう  
く存事おといりも女子に老いまでいりてまの御務  
のふりてと立腹しては時よ寺より恒常も毎て少  
のふりて立小僧と立返して中と云作の指さして云極  
熱して沙門の勤いよ愛りの極多身と袖沙人の  
親も老い何年出立と云ふに夜と存してさへさる  
希ぬも増えやそ方おも山僧り中と綴と思ひお角云  
いり心ういり連もおぬいさすういりさるのうとく山僧  
を佛へ歸り中してさるういり徳且那の園とくも何ま  
右に茶糸の云はしを後とて先味物の物取お交とて別後  
山僧りいり青もまお味物取を指しりて物取成線小  
僧めい後抄子の背りうて指しり月朝の物取を指しり  
中付さても一急い入は比日と抄子二本も指しり  
膳棚の角より五割一は或見は白次も若隠へ引  
用事とてはと化しては是も子細何事と云ふ存  
の通り例奉代友元南村へは是の時定て尚存も宿  
後いり月名隠前をうてふ月連より有うて地下中の  
お後とて地乞の爲も宿殿のを前も新交若隠と化り  
海も是の代友元地乞の爲も中も後在若僧と初誰  
とては世書隠り若らり此小僧を人語五りて有



子付夜々中付迄とも法入の供又髪を利半事に出  
の勤も同前よりいふ事小も一と判るごとく我未既を  
常より南うい判りせしに於て判るは比日已う既を自  
判りすも程も成りいふ事増えや人の改い子流うと判  
い友は程も我未髪を判りせしに能くも新法いふとて  
既中とていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
つり既中より血を付け癒業法付より小僧の親を  
いふ事横を打大に驚き建惑いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
持大急とゆめをいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
勤る角いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

格別ノ遠方物成ると仰りて

指崎物語

天正十二年巳月廿五日之雲動の爲に沙書成下を以  
侍りて是年信雄の志を不変流牙とて候今とて通  
りしりの沙書成 神者よりいふ事いふ事いふ事  
家来井上新五郎の沙書成下小笠原内務助  
二百石下木島子次郎の海見也  
廿八日秀吉某殿の右席友松坊と云ふ名は次九秀揚成  
大母も我未髪を判りて川の船橋成て我と江中付木村  
飛澤是とていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

一三九



近頃の支度すべしといふ中秀吉一軍も別々相軍勢の  
立所は井原赤鬼なる中加平のいすしきさの秀吉  
曾孫おとろしる

同日池田勝入首を別あし井の町廿カセ派二節と云者の  
飯袋の内一先を埋むは左様ししゆふ知

秀吉の熱軍勢長久島の軍よあちあれて一向塔の明一役  
引て出遊ししゆふ知と云て

毎日備大將を呼明親日小技を熱攻ふすしゆふ知と云  
勢支度す然今夜中備大將を呼明日熱攻ふすいなり

左様中て明日英濃路へ引拂ふ處しと云て殿の備生老三郎  
日根神傳中細川頼中が村藤澤出。此中付 神若の

又いハ熱攻の極子と云て中と云る今頼中も此と云あり  
城支物語和泉玉虫四郎兩人ハ意菴子初ハ謙信ニ社へ

次ニ信玄ニ社へ其後 御家へ参ル一族ニ玉  
虫忠兵衛ト云人長久手ノ後ニ一門共ニ語りテ

ルハ謙信信玄ノ儀ハ日頃委鋪存候得共 神  
君ノ御様子不存候間旗本近ク参テ 神君ノ

爲体見奉ラントテ御旗本ニ有之其時 神君  
玉虫ヲ御覽被成イカニ玉虫今少ニ御見合被成

歎へ鎗ヲ入テ御見セ可有候左様ニ心得候得ト



御意十サレ碓ヲ美リ玉虫ヒリカニ申候ハ軍汰  
ハ鎌信信玄ニ御劣被成候得共勇氣ハ兩將ニ御  
勝リ候頼母敷存候ト申候

相持物語

六月朔日徳軍勢支度しつ流石御座の候ハ後浪神流々  
長政云惣軍勢出渡りつ山の方ハ人殺と云候と云候  
亦村常陸日根神御中細川越中横田半兵衛ハ二番長谷川  
夏之席細川兼一の殿とす人殺ハ大軍ハ尾田勘兵衛右左衛門  
大吏也人ハ云付て細川ハ人殺越中横田より喰取ハ横田入  
より中付樂田ハ山越久吉郎と云沙太山ハ木及北門を  
九沙夜中ハ候人殺と云川より取取やれと云勢人殺と云川  
よりと云候雄々 神意ハ此系喰取ハ中入と云中ハ大軍の  
初ハ喰取ハと云候是月大月助右馬ハ大京久亮 修羅ハの  
助右馬ハ紙子羽藏久亮ハ黒子吹取と云追進取と云付喰  
取ハ細川ハ法村ハ八後大京久亮ハ白羽藏兼光ハ大京久亮ハ  
之喰と云世大月と云候ハ候て其ハ何某ハ首と云と云  
助右馬ハ初より大京久亮ハ其ハ是と喰合世候りし付  
久亮と云りたりと云候ハ是を何と云候ハ川ハ川也ハハハ切小  
すハ是初子常陸ハ助右馬ハ目根神御中ハ家来ハ刺取  
監能言ハ是ハ常陸ハ助右馬ハ初より神子田半兵衛ハ越前守  
此ハ久亮也老候と云ハ此ハ神意也



二重堀の六堀之長年居るを山より水及堀内居る秀吉に  
友義の事あり

八月、百太郎の因富田、陣留、信雄大内、因り長  
河、正海、秀吉に、は、は、は、と、上、方、一、向、り、て、は、諸、人、の、聲、を、聞、  
ぬ、信、一、如、賀、の、井、行、り、景、の、お、城、を、攻、む、下、し、て、是、を、地、に、置、  
七、名、と、云、者、何、り、是、に

南朝の元中、年中、親王の内、一、つ、は、徳、川、へ、来、り、南、時  
尾、張、り、居、る、如、賀、の、井、は、居、る、是、を、自、ら、攻、て、弁、形、を、攻、  
居、る、城、を、如、賀、の、井、邊、河、を、平、井、邊、河、を、討、て、出、て、佛、く、首  
の、末、羽、邊、に、居、る、家、を、及、白、沢、井、や、八、と、邊、河、を、捨、合、や、八

と、組、内、の、や、八、例、の、大、指、物、相、へ、り、り、と、勅、や、八、組、志、り、れ、る、  
と、云、城、中、の、若、上、り、や、八、と、存、二、捨、棄、つ、内、へ、入、り、平、井、邊、河、を、  
弱、り、而、も、や、八、劍、匠、一、平、井、邊、河、を、お、さ、る、細、川、敏、中、と、ま、  
平、井、首、と、や、八、よ、り、お、秀、吉、へ、送、る、

感状記

秀吉小高キ塚ノ上ニマシマスニカ八助直ニ御目ニカクル  
秀吉ノ曰ク此首ハ平井駿河守トテ當城ノ大將  
分ノ者ナリ其方ハイカナル者ソ細川越中守家  
禮ニ澤村才八助ト名ル秀吉ノ曰越中守亦牧  
加賀江ニテ戦功タクヒナシ汝等モ一方ノ將ト  
シテ我先ヲサスヘシトテ當座ノ褒美ヲ賜ルハ



シトアリケル比褒美ノ物イマタ来サルニ依テ  
覚書ニノセラレタリ秀吉ハ褒美ノタメニ金尉  
斗付ノ大小金銀十トヲ毎陣長持ニツニ充入テ  
持セラル此者ハ秀吉

源君兩御代トモニ忠

興ノ先手トシテタクヒアラサル武功ノ士也

相持物語

亦也痛<sup>ハ</sup>攻被<sup>ル</sup>城申の者防意<sup>ニ</sup>強<sup>ク</sup>河<sup>川</sup>將<sup>軍</sup>海<sup>軍</sup>  
秀吉和<sup>シ</sup>乞<sup>フ</sup>秀吉<sup>ハ</sup>取<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>城<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>半<sup>ヲ</sup>是<sup>レ</sup>遊<sup>ル</sup>死<sup>シ</sup>一<sup>ノ</sup>半<sup>ヲ</sup>  
軍<sup>ト</sup>一<sup>ノ</sup>々<sup>ト</sup>折<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>て<sup>退<sup>ク</sup></sup>城<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>今</sup>秋<sup>ハ</sup>あ<sup>ル</sup>七<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>付<sup>テ</sup>出<sup>ル</sup>

城申林<sup>ノ</sup>名<sup>ハ</sup>馬<sup>ノ</sup>付<sup>テ</sup>か<sup>ル</sup>氣<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>志<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>付<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>出<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>

其<sup>レ</sup>用<sup>意</sup>有<sup>テ</sup>一<sup>ノ</sup>番<sup>ノ</sup>薄<sup>シ</sup>生<sup>レ</sup>氏<sup>々</sup>付<sup>テ</sup>出<sup>ル</sup>その<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>あ<sup>ル</sup>城<sup>申</sup>ノ

出<sup>ル</sup>氏<sup>々</sup>何<sup>者</sup>と<sup>申</sup>申<sup>ス</sup>時<sup>ハ</sup>あ<sup>ル</sup>言<sup>ハ</sup>坂<sup>ノ</sup>左<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>坂<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>坂<sup>ト</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>

の<sup>レ</sup>も<sup>申</sup>物<sup>色</sup>者<sup>ト</sup>計<sup>ル</sup>と<sup>申</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>林<sup>ノ</sup>名<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>返<sup>ル</sup>あ<sup>ル</sup>意<sup>ハ</sup>軍<sup>勢</sup>拮<sup>拮</sup>

あ<sup>ル</sup>より<sup>一</sup>返<sup>キ</sup>出<sup>ル</sup>氏<sup>々</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>百<sup>余</sup>人<sup>ヲ</sup>付<sup>テ</sup>あ<sup>ル</sup>子<sup>種</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>

南<sup>ノ</sup>氏<sup>々</sup>を<sup>レ</sup>縁<sup>者</sup>也<sup>ト</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>あ<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>免<sup>ノ</sup>殺<sup>ス</sup>る<sup>ノ</sup>楠<sup>十</sup>市<sup>掃</sup>れ

て<sup>英</sup>少<sup>人</sup>是<sup>レ</sup>も<sup>殺</sup>さ<sup>ル</sup>秀<sup>吉</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>竹<sup>ノ</sup>氣<sup>ハ</sup>巡<sup>ル</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>水</sup>取<sup>ル</sup>

ま<sup>一</sup>と<sup>一</sup>と<sup>一</sup>申<sup>ス</sup>先<sup>ニ</sup>去<sup>リ</sup>如<sup>キ</sup>野<sup>ノ</sup>井<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>

七日<sup>ノ</sup>行<sup>ル</sup>氣<sup>ヲ</sup>取<sup>リ</sup>と<sup>一</sup>と<sup>一</sup>と<sup>一</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>城<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>築<sup>ク</sup>也<sup>ト</sup>

切<sup>リ</sup>け<sup>城</sup>申<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>破<sup>ル</sup>源<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>物<sup>色</sup>也<sup>ト</sup>水<sup>ハ</sup>和<sup>シ</sup>勢<sup>ヲ</sup>た<sup>ル</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>

多<sup>ク</sup>も<sup>一</sup>城<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>築<sup>ク</sup>十日<sup>ヲ</sup>あ<sup>ル</sup>水<sup>ヲ</sup>う<sup>ケ</sup>る<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>攻<sup>メ</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>子<sup>種</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>

六角<sup>ノ</sup>入<sup>ル</sup>及<sup>テ</sup>兼<sup>テ</sup>禎<sup>ノ</sup>氣<sup>ハ</sup>右<sup>ノ</sup>邊<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>水<sup>ハ</sup>攻<sup>メ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>ル</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>後



秀吉申玉にて水攻を以て利運之  
之按古佐死去甲別九也

神若尾張より出入り持分の国信濃上秋家事治田の馬討  
神若尾のそらよ海より信田小笠原と頼んて之京勝つて之  
後早人殺すと云と物取川中治上條の城を義晴の運意の頼  
子有と云信有之云元存知京勝より長浪の城を治津治  
治を不徳出へ中付カイツの城と云押須田と攻る上秋の  
物取須田城お討ふもる是十日目の比也

六月十日成り行々の十日候より増信士麻へよる書子秘傳

同月七日受渡新彦を馬つと云者といつてこれのせ也 秀吉

唯系と云秀吉もさすり承く居るは如右有るの先より一節  
小玉の依り内務の助押花田又左衛門居る是より物取を月  
の首の取收今日物取を披見のと云文云く該を不文云有り  
尾別川十二の城と云く是迄治すへ一十の物取の比に八  
比と云書實の半分も手に不附の秀吉大勇の文云く川十二  
ノ軍田より沢井左衛門居る少牧へ来る十せ来るは信雅ら中  
左衛門去三方の沼へ該砲二挺多くは防るまは先達之比に  
元是へ来る比と云 神若尾城治感の如きは中の一

秀吉楽田の辺小笠原の内へ  
是田も水攻より後沢井修理業田を討て悦と云



その邊より取付しと唐者の人殺を一度追廻り唐者を又  
院に染多致し其後交交を内和を乞ふ以兒形等の并  
竹の八十ヲ攻落し一尾田をも降糸させる伴勢返つる向極  
子と

同十六日大垣より伴勢素急初に正系小伴勢々々不九りま  
二市多清と化並 神君を小牧小左衛門尉と化並

清洲へ出陣し成伴勢実在岳山松ヶ濱追唐者の方へは信雅  
市中付依之方渡河をせと蟹江と化並は枝城前田の前田基  
七市長程後討る加賀下市場より身前前田と平次定利大

勝より山宮寺迄前勢政依之方渡河り取来大忠信に種と  
雅依中よりりし後信雅へは作お高時大忠信も成忠實を  
只右邊より 市家へ正右衛門と

前田平兵衛一為も成取むカヤヲ一渡河り渡河程利母方  
の叔父成親重之渡河左をも信實の清く渡河り伴勢の津  
小居る渡河カヤヲ一化並と志つしよりりももと能事と  
平兵衛へ中世し蟹江より上り信實と川入夜め取れも  
能極し挑成の巻下と中世平兵衛と直者成是し同は前田  
と平兵衛ももあは極すはる山台平次所をも追める是  
い等しふ更渡河りの恩成あつし一母も信雅へ渡河り  
つ出し是るる人成之丈一補一教されい是廻りし一忠實と



船難しとてふ文

天正二年長久保合戦の後本房嗣 死後子若狭少将  
初事山村子村を介しとて秀吉に内通有者浪小大膳  
保科親虎が西進是を攻取つて池田秀吉より本誓の書と  
忠政事方友人致し引とり保科殿のよし

落穂集 其以 家康公より尾刺鯉江の城へ出働の中在りて子

伊之瀨川左を折檻一益後信長此界より一歩も引置る  
池田了羽宗前前も宗田修理也なりとお傳ふ信長の清徳  
お濱の御旗を置給ふ事し信長の指し在りて羽宗宗田の  
お家中もあま成合と云々なり月瀨川に宗田と一味は  
おに勝ぬる志つり敵の一戦に御負致方の山の左の城に於  
て自取内しられ瀨川力を落し秀吉に降参しつり  
信長よりありしつり小仔誓の取成秀吉にお渡し一命令を  
仰りたるこの仕合より瀨川を宗田の所と取して在り  
りる今度信難の指し実秀吉の忠告より一戦も  
只果とめくし尾刺鯉江の城に宗田と一命をおく  
九寇在りて電と和祥と同和し六月十六日の夜鯉江の城  
小を落す 家康公よりお打置瀨川より城に於ては  
此城は松や山や山お馬に松鯉江の城へ出向せ給ふ  
并仔万子代大次を介しとて秀吉に降参しつり



天正二十六月以流河川を以て九鬼一也と申せ九鬼在之子  
修般より宗大時之城山を平治申と書り并修般九鬼一  
也と撰む勢は城を以て破流河川蟹江にけり

河家のスツハありお世知らずと有町屋一火を撰り中一  
蟹江の方小火の子んゆか言たりと一あれと上意此馬  
と成此言と出せし由意なりソレ世と云此祐平解成と書  
てあると也と書又いあ——お馬よと書と上意此馬  
く此お蟹江の流も此お流川に今流山ありそ来る人  
ぬりうと申し政の流川父子流蟹江に入ると城を以て攻  
本多八景一番宗と名あり城一付討死水也悪形伴  
實者の内より多し一居て能くをまらけ時ふ父の幼氣成  
るうて居る之九鬼う承流川通下市場一けりお田と平流  
居る城への入と守る是流河川流尾居の津治より一延付  
る大時一の山守り申も是一延付る佐藤今人教も是流  
よりあり一多し一戦毎軍有て九鬼一也と打破流河  
一也と胡比宗今言流河大九鬼長と書と一撰と有る流  
川に流るを不と云う一是自ふいやと一撰と有る  
神君お多平今言流河山に蟹江と有て佐之方右衛尉佐  
藤一延流の時の右衛尉と有て佐之方右衛尉佐藤  
一延流の時の右衛尉と有て佐之方右衛尉佐藤  
一延流の時の右衛尉と有て佐之方右衛尉佐藤



百美酒之懸山流民初是ホ大蛇之正也重江年(出懸成  
九鬼舟よりあすの右へ向く通舟是を討九鬼大隅追  
被る行も沖威成下

大和古旅の城を筒井綱 古旅の因是を秀吉は是有  
て勢の王、九へ来り渡辺の事記

十九日山を初り市場を攻る事より山を重江年人教  
攻る大平よりも攻る山は家来竹内是八帝前田と平次成  
討九首の因能首と一楽田の方つげる(水威威志耀

同日蟹江と攻め初動か(水老と攻る獲を被まても  
之獲出九と攻る九の流川是初て有る(水大よあつて二の懸  
人教取つりめ秀吉の和勢とつたと思つても附入を思つ

小口と追退して川入へ(とカイン門に付ておるは(と  
若湯天左衛門前田より目懸(左衛門付て出る目懸(二の九へ  
川九太子の橋のと(と(松平重江帝若湯と流と合せる流  
川左衛門橋を入(人数と(被とする(水味方(本多(出八  
人数も(来る(左衛門(耐人(教(戦(方(山(平(古(人(数(入(留(る(攻(る(水(味  
方(の(諸(士(働(く(言(高(討(死(も(有(山(下(知(方(く(指(を(突(せ(る  
弱井橋と(つ(城(中(を(見(す(う(流(炮(を(其(の(打(火(矢(を(も  
其(後(付(重(教(は(攻(布(也(悔(破(る(二(の(九(の(向(い(く(大(陣(有(る(と  
大(和(十(八(艘(程(年(も(有(九(鬼(舟(も(く(水(勢(よ(あ(る(と(水(無(方



の諸士小あしとてしを討破る九鬼船小あし宗務り逆る

武功實録

小牧陣ノ時敵ハ井伊兵部ナリ九鬼ハ内府方ナ  
リシヲ大閣ヨリ達テ夕ノマレニ故蟹江ノ浦ヘ  
舩ヲマワス時ニ 權現様ノ御舩清須丸ニ間  
宮酒之丞乗テ湊口ヲ方サヘ居候此時日本丸ヲ  
舩サキキワヘカケヨト下知メ少々舩ヲノリ破  
候其時九鬼家来村田七太夫名乗カケ酒之丞ヲ  
呼出シ相タメニ致シ刺ヘ鉄炮ニテ酒之丞ヲウ  
ツ其サハキノ内ニ九鬼カ舩無事ニ押通り候七  
太夫一人ウタレ諸人ヲ堅固ニトヲラシムヘキ

トノ手段ナリ

九鬼常ノ咄ニ大舩ヲ堅ニツクル時ハ十四艘ツ  
クナリ横ニハ六艘ツク凡三艘表ニ艘左右ニ二  
艘ツ、  
千石積ノ舩諸國ニ何艘アルト云事ヲ舩頭共ニ  
タツ子テ知オクヘシ  
舩備ノ時安武ノ前ニ関舩ヲ二三艘ツ、置テハ  
ヤキ為ニ用之陸  
陸ノ畝ニハ陸ノ高下ヲ考ヘテ舩ヲカクルナリ  
鳴ヲ楯ニスル考ヘ但陸ヨリ通路ノ有無ヲ考フ







この節田と一節と教書被し一と首成 家康公の御書  
おまを以て長き傍と首成候とあり被方の御書に一と申す  
に被りしと

明良洪範

蟹江ノ城攻ノ時石川伯耆守組内藤彌治右衛門  
伯耆督下知一番二城二乗二番二松平隠岐守三  
番二伯州乘込故立腹メ軍添ヲ破リ組頭ヲモト  
キ下知ヲ不用取不届ノ仕合ニ候急度被仰付被  
下候へト申上レハ其方ノ申込也ト被仰早々  
可成敗ト御十夕メ伯耆立タル跡へ内藤ヲ召呼  
レ御念比ノ御意ノ由也亦昔蟹江ノ城攻ノ時

徳川家ノ歴々七本鎗ト世舉テ称スルハ大久保  
新八郎忠利同甚四郎忠貞同七郎右衛門忠世同  
次郎右衛門忠佐阿部四郎五郎忠政杉浦八郎五  
郎鎮貞同八十郎鎮榮也是ハ 廣忠君攻玉フ  
時ノ変也天正十二年城攻ト言ハ誤リ也

柏崎物語

天正十二年七月十日清洲へ涉る事ト入同十日小牧より  
此物見小牧の楽田も此物見小牧方の勝味方軍と子軍別  
元又此物と子軍の末と切若く此物負事ト云所ト是  
物数七人ト云物見ト付有

天正十二年八月十日首成被の方より是合有物と云所







清道よりと岩田村に流しつゝとあるまゝより先づ氏々の  
身と縁一は取なうゝとせし中 小菅稲妻 小菅と  
幾米の稲妻ともをくとなき宗ある岩田今取れ  
く先とある所は浪の総尾の甲光宗有て見れ氏定  
終り多し我の誰々と此中私とて先づ宗振の丁とカ  
り中右左一同小付て出る氏々の家出漸高し延付の  
れは信用小口と此のうけぬとては合点と以中出り流の  
繪のき子田中新平氏々の前へ又塞り止る石竹末尾方  
とけく付てうる小川三ヤウ村のりふて我中川庄  
新総尾の甲と見付て付しと流のく十機門細  
竹某十九才十八兄首世余才首十九と名守の氏々少此  
を流しつゝ追付中川庄流をけく働く氏々の馬  
は平首と流し一切と守る田中新平總塞り付るそ氏  
々退るスカゼト云ふ言橋ふてまゝか合点新氏々目  
掛てうる馬とより承兄の流しを拂流し入氏々の切  
掛の何某を方へ入庄流し付る程も目掛をむ氏々  
よては掛中川の先有追付し復浪助右掛の合中七能首と  
取方也の兄の他八相流し流し組幾れ首とより承  
り此流し流し首と取テシゲ幼を師流し流し三年働中  
軍人余付は幾千二百人余付る中川庄流中一海の家物



備く自首と雖も今も其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
候け首の尾川首也付に其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
之の中を氏々方賞與合名其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
中へ其の事未だ終らざる者氏々方捕り

八月秀吉尾張院へ其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
百小牧の首也付に其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
小牧の首也付に其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
人殺し勃一勇威をその事未だ終らざる者氏々方捕り  
廿七日松平直政が羽鳥樂田の邊に其の事未だ終らざる者氏々方捕り

この後松平直政が羽鳥樂田の邊に其の事未だ終らざる者氏々方捕り

如き此後其の事未だ終らざる者氏々方捕り  
アハク其の事未だ終らざる者氏々方捕り

秀吉越中ノ牧佐々陸奥守成政ヲ攻ラル、ニ前  
田肥前守利家前鋒タリ成政兵ヲワカハシテ逆  
撃テ利家ノ先手ヲ敗ラル利家コレヲ見テ我先  
手ノ將追立ラル、トモ必ス返サシ者ハ山崎庄  
兵衛ナルヘシトテ自親軍ヲ帥ヒテ競ヒカ、ル  
敵ニ駈向フ庄兵衛後ニ名ヲ長門ト改ム劍髪ニ  
テ閑齋ト号ス親軍間近クナリタル時按ノ如ク  
山崎馬ノ頸ヲ旋シ勝ホコリタル敵ニアタリタ



予マナ切崩シテ追討ニス利家山崎ヲ呼テ今日  
汝カ刀ヲ以テ勝利ヲ得タリ然レトモ何ソ返ス  
コトノ遅カリシヤト問レケレハ山崎臣モ速ニ  
返シ合レト存候シカトモ道廣クシテ親軍遠ニ  
返シタリトモ士卒恐ル、氣アリテ戦危カラシ  
サレハ十分ニ引カケテト存左右ニ目ヲクハリ  
候所ニ幸ニ田間道細クテ兩方涯深ク見ヘ候ヘ  
ハ敵兵ヲ分テ引包ニ便リアラン親軍ステニ近  
ワキテ將士色ヲ直シタルニホアイヲ料リ聲ヲ  
勦シ旗ヲ還レテ君威ヲ以テ切勝タルニ候トイ  
ヘハ利家汝兵ヲ用ルノ味ヲ知タルコト我ニ勝  
レリト稱美セラル山崎力差物ハ銀ノ菖蒲也  
佐々成政一萬計ノ人衆ヲ率テ能登ハ末守ノ城  
代奥村助右衛門ヲ攻ルコト急也前田利家邊報  
ヲ聞テ七尾ヨリ四千餘ヲ率テ後援タリ利長モ  
出アハレヌ利家戸田與五郎ヲ使トシテ原彦次  
郎不破彦三ニ告テ末守ニ來ラシム戸田深夜マ  
ツ原カ宅ニ到テシキリニ門ヲ扣トモ門番熟睡  
シテ起ス時移ルハカリニテ門ヲ開タリ利家ノ  
命ヲツタヘテ又不破カ宅ニ到ル不破早速出ア



ヒ心得候ヌト返答ス戸田ツレヨリ馬ヲ早メテ  
利家ニ追付タリ利家汝壯男何ソ遅カリツルソ  
ト責ラル、戸田謹テ原カ門ヲ開サルコトヲ云  
ヒ利家聞入スシテ怒ラレケレハ戸田心中ニ惡  
キ使ニサ、レテ辱メラレヌ今度一番鎗シテ責  
ヲ塞クカ討死スルカニツノ間ソト思ヒ定メケ  
ルカ果ヌ一番鎗ヲ合セケレハ利家加増ヲアタ  
ヘラル是利家士ヲ激勵スルノ術ナルヘシ激勵  
ト慰勞ト俱ニ用ルハ士ヲ御スルノ道ナリ成政  
ハ利家神速ノ後援ニ遭テ敗軍ス此時本多三彌  
正重武者修行シテ利家ノ備ヲ借テ君タリシカ  
利家逃ル士卒ヲ制シテ部伍ヲ固メラル、ヲ見  
テ三彌馬ヲ乗ヨセ高聲ニ恐アルコトナカラ勝  
ニ乗ニ如ストハ此所ナラン敵崩タナテ一足モ  
返サレ御下知アルヘキコトナリト云フ利家汝  
何ヲ力知ントテ大ニ罵テツイニ城ニ入兵ヲ収  
ム是勝ヲ残シ師ヲ全スルノ意ナリ成政軍ヲ引  
テ後利長ニ諂ルヘキコトアリトテ同道ニテ七  
尾ニカヘリ飯酒畢テ利長ニ向テ我三彌力諫ヲ  
用サルコト思慮アルニハナリ凡武者修行ノ者



ハ已カ功ヲ立ルヲ主トシテ實ノ忠ナキモノナ  
リ已カ一言ヲ以テ敵ヲ逐セ大利ヲ得タリト他  
家ノ讐ニセシタメナリ縦ヒ我員テモ三彌力員  
ニナラス假令ノ徒ナルニ由テ三彌力身ニ損ナ  
シ其上ノ昨日末守ノ城ヲ圍ミタルニ今朝後援  
ニ赴キタレハ飛脚道ノ往來ヲ考テモ我兵三四  
千ニ過シトハ知ヘキコトナルニ其ツモリナキ  
ハ成政力失ナリ一旦ハ不意ニ遭テ敗レハシル  
トモ成政力志ヲ料ルニ如又後援ノ衆少ナルコ  
トヲ知ラハ吾追スル彼返スヘシ況ヤ急ニ追ト  
キハ總返ニカヘサシ返サレテハ必定我師ノ員  
ナルヘシ是ヲ以テ追スト語ラレヌ

武徳成業卷之二十一終



武徳成業卷之二十二

伯耆守加藤正脩編

柏崎物語  
天正二十九月十七日 神君少牧邊中巡見秀吉將邊出

太名保治右衛門お見了し出り上り方お出り出り合上り方の首を  
五 神君少牧邊中人致大お入り下り巡見合の願持中縁を

見り上り上り方勝降く秀吉静めて今夜致十丁お山の方へ入り  
其縁を中入之キリと成 信雅々も其秀吉宗子甚く向く唯  
は右様とくくく人へ致す多く持居りて有答見方りるを  
るに居り也

九月廿七日秀吉宗徳御入り 神君清洲へ由り







多敷三仕と云ふは少備若中修後片信月相平と及重保  
新八を信房主同十七日長崎へ中馬を引入れ之由二月廿出  
るより十月十七日長崎へ中馬を引入れ也其内小平寺と相掛る  
か板橋より有りと長崎へ白ちを引寄板の上を降りて白旗  
と云ふとより相掛るれり中或日秀吉は伊勢濱へ長瀬河へ入大板  
と云ふ道合有柳原のよの馬を引来りて有り秀吉は中へ天  
下の伊勢を引信房の少勢とてわきとて相合ハ天晴り可敬  
の者也 徳川家より伊勢士者としてのか威一に中へあつて  
に和贖の企有

秀吉は信房後書月廿信け後は大和の志を以て伊勢へ入國人を  
河へ引りしれ信長へ恨有者有るは向勝被國人をかくりり  
信雄の志を奉りた方の上野の城を以て長月二日の夜子に  
信南秀吉收て伊勢を大和の筒井次郎とて引くは其國より九  
万石を引け上山城の門二万石大和の向領ハを信して勤務万石  
程く大和に成伊勢へ移る筒井伊勢守定次と名宗相合右道  
重政壽總應知流左道を筒井の二家とて大和ハ少一寺秀  
長への忠儀とに成後大納とて志摩守丸尾右馬允と  
生駒基妙後漢 正備ともあり其後田上野介初上野三平  
しりしをよとてか備くとも領知をよつけけは秀吉引連  
歩引下八百石の人數を秀吉基因り上野の勢の勢をよ







別法権なくありし方助之情是之由なるべし右に執在中入  
信権ハ神ノカ昔より其形如く在り執中執右甚收く子  
也又其心慮も亦知有今世の色持不ぬなりハ石臼ノ會  
盟をて過く過事ハ其後ハあり 神君は神ノ中ノ由候  
る有事ならずハ年亦よ過事ハ其後秀吉の孫ノ歎也  
くらく相付候法例ノ在るは其ノ所も亦知 神君は神ノ  
由出候其右に執中酒井中由一申上之如く信権ハ其  
中東上之也又其ハ其事其のり天ノ備氏ノ收くく御れ  
ぬ矣田川ノ河系マ千マ川ノ河系と云け方一ハ河系を  
川を隔對面有秀吉の如く平物一今日天の物けを  
ぬて其ひ君を強一申上之力を執中其後ハ毎田平右衛門  
津田隼人之信権ハ地方歎れハ信権は申上之り人殺をマ川  
持且又我亦其地をよくて也一其申上之秀吉長入りハ其言  
神君ハ法例一其右の孫子申上之其相付ハ其由の長君我亦其  
作事え親友也其支離一紀列ノ中合海田水江爲を其事  
其政ハ其月通中一其其後ハ紀列ノ島山中合根其一も申上  
其海ノ海賊中合大政ノ攻入其事一其申上之其ハ其カ一其  
其れハ一其ハ其信権和睦一其其其其其其其其其其其其  
其を攻く一其其其其其其其其其其其其其其其其其其  
一其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其



も跡をよかり也

十六日早朝(四時)に御秀が八丈坂へ向ふ 押寄申年(十)に秀

右に十九歳也

老人雑話

大岡の屋敷に居る八丈とて申す方々の一人有或付大岡我了矢  
次第に世に今と昔とハ何と諸君に申す有付空曰之信  
お信と大岡收んで曰十倍なるれと猶行申す信曰之矢  
昔の如しれりくと大岡不信して何とてわづらふと宣ふ言  
て曰空曰我八丈とて申す方々のれりといふ大岡歎し

武徳大成

凡長久手小牧ノ役松平内膳正家廣松平勘四郎

信一 松平加賀右衛門康次菅沼新八郎定盈同越  
後守定吉同山城守定政同次郎右衛門尉多田三  
八郎昌綱小澤瀨兵衛忠重山本新左衛門重成河  
窪新十郎信俊駒井次郎右衛門昌長山高宮内信  
直柳沢源四郎信俊津金又十郎久次新見七郎右  
衛門義清同彦右衛門正勝高林与五右衛門昌重  
日向半兵衛政成山中主水正久行折井市左衛門  
次昌山田十太夫重利山田志賀左衛門正勝山田  
金六郎正直山田平十郎正勝小笠原十郎三郎信  
嶺同喜三郎安勝植村家次飯嶋玄藏正勝高木主



水清秀同志摩守一吉水野和泉守忠重高木九助  
同勘左衛門安藤金助家次安藤重倍河野庄左衛  
門盛政水野六左衛門勝成阿部弥市郎信勝永井  
善左衛門安盛朝比奈弥太郎恭勝其子權右衛門  
泰成高力与次郎正長三宅弥次兵衛小幡又兵衛  
昌忠三井十右衛門同孫助坂部又十郎正定坂部  
三十郎廣勝土屋三郎右衛門昌吉鳥居左京亮忠  
政加々凡牟人正尚朝比奈左近宗利同彦右衛門  
真直同新九郎昌親同源右衛門恭勝中山茂左衛  
門忠光渥美源五郎勝吉五味主殿助政義今村彦  
兵衛重長同九郎兵衛吉正近藤登之助同小十郎  
内藤左馬助政長内藤金左衛門忠清青山善左衛  
門正長同又六郎重次内藤与左衛門重政伊藤金  
五郎其弟喜左衛門春景加藤源四郎正勝同喜左  
衛門正次同茂左衛門正茂同傳兵衛正信同勘右  
衛門正次都築弥十郎正秋同六郎右衛門勝時西  
山源七郎昌寛大久保新七郎同新八郎天野三郎  
兵衛康景峰屋半之丞戸田孫六郎康長大久保与  
市郎忠益水野太郎作小林又六安藤對馬守大久  
保荒之助忠直成瀬吉助重宗秋元甚兵衛吉久渥



美久兵衛友重椿井三河守政定江原玄蕃金全竹  
内五左衛門信次武藏孫之丞渡辺忠右衛門内田  
新六郎正次小林十太夫正吉同平右衛門正次神  
谷与次右衛門清次同左馬助三正大岡七右衛門  
義勝大草深右衛門忠成宮重傳六信房柳原喜平  
次正成同隼之助忠政大塚平右衛門忠次落合平  
平次道久复目長右衛門信次金丸回郎兵衛久次  
寛勘右衛門元成其弟助兵衛為春深深津弥右衛  
門正吉美濃部康子之助茂廣設樂兵庫頭貞清久  
松彦左衛門忠次永井與次郎吉次松平萬五郎勝  
綱同次郎左衛門長綱同半六久久世三四郎廣信  
多門平七郎重正同平藏信清朝倉六兵衛重望月  
与太郎服部仲保正石野三左衛門廣長青山虎之  
助久永源兵衛重勝永見新三郎晴定松平五郎右  
衛門伴若狭守兼盛藤田助藏小笠原傳三郎半禮  
卿右衛門三枝八郎左衛門向井將監太田久太夫  
及七柳原康政力家士原田權左衛門村上弥右衛  
門富田三左衛門丹羽四郎左衛門都築五左衛門  
等或ハ討死或ハ首級ヲ得テ各軍忠ヲ勵ス  
神君是ヲ感ニテ或ハ御書ヲ賜ヒ或ハ領地ヲ授



テ褒美ニ給フ鳥山左衛門佐貞政モ 神君ノ御  
内意ヲ請テ根來雜賀ノ兵ヲ催テ之テ信雄ノ告  
ヲ待テ樂田ノ後卷ヲセシトス長曾我部元親モ  
貞政ト合心ニ大坂ヲ犯シ攻レトス然レモ和睦

ノ事ナルニヨリテ其兵離散ス

廿二日 羽柴秀吉權大納言ニ任シ從三位ニ叙ス

柏崎物語

秀吉大坂ノ陣ニ付テ後田陣圍ヲ 神君ノ使者ノ言ハテ  
惟カも勝川ニ命ジ勝ヲ浮使テ也トテ之ハ信長ノ御好  
ミヲ思召テ惟々ヲ中敵ニ成リ後田陣ヲ中取ルニ付  
信雄々々ヲ中取ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取

ト也信雄々々ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取  
テ中取ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取

石川伯耆守中取ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取  
ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取  
和睦ヲ成テ秀吉ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取

大軍を召れて皆々結一ハセテ是ハ何ノ中取  
返事ハなすひと上云々何トモ作候ニ使向テ秀吉  
ハ下取ノ御將トテ作ル也トテ秀吉ノ中取



神君を申ししはぬれ申しくは極ふぬ幸奇は殺石川ハ  
大ら出るところの也

中園ハ作し内藏物無二の後推方少て前田又原其つと各信推  
を忠時之 神君ハ中相法しとく好之何とて其れを殺  
殺を案せり亦日の月ハ一回くしと年方の五つは殺を  
人のふ知極くて何とて殺し大將も合忠を以て殺し之世は  
を殺し之くしとて大將も之世を以て殺し之業する事あり  
とてしと存し之を殺し神申の印山の城を五月十六日まで  
おとす若者百人百邊て其の中を以て十月に神君を  
五月月か日をうりてとて二月迄毎日は言ふ山もふ

五月つとこの間の信君の内を信徳殺し出づ信君をよむ

かくともう利つたててとてその中を去つてや其れは信君  
の幸乃若して信徳の強弱つていづれ松ノ後進中一田島中地  
を去りて進下收十二月に日渡相ふ肩大なる保七とて其  
宅小島赤地をさる相ふ白老城して成政中とてハ七ノ若  
信長の好むを思ふ信推を中政と御所天下奪て其れ  
也信國田一統の天下を治り信推を以てとて 神君意  
小遠路能くさるる秀吉とて敬ふし信推を以て其れ  
の取を忘れけしとて及左利義に乃り是今又破つとて  
相ふし其れ若し一軍殺しつり加藤をハて是とて信推有







信雄甚恨之欲在秀吉へ中送秀吉を恨之由信雄を  
討つべし地を以て成任用して會指して彼より去るを  
信雄之日運届して甚恨中事士も難ありし中  
之節に帝定賜を喜ぶに事しむる信雄は 傳通院極中根  
と成任用之帝へ人質を成病牙と成子世致し今定勝斗の  
樂しむる中用しむる信雄は 神君も是は形義丸極  
中浪人として出入友を去るに極、南年十二より成  
石月伯耆守中送中伯耆將指の代布多の信雄の子福子  
代丸國形東より南東大なる力と成帝好野と成及成所人  
之ありし上より中事秀吉討つに恨めて河内の中より  
中折願き万石より中折中河内中事秀康令と成稱伯耆守  
送中御家 續閑談  
權現稱中事人太身成る人質を秀吉へ送るに成事多  
大浦中ハ我おし人質を去るに成事多成り成事多成り  
女房扱ふ中事多思成りし中事多成りし中事多成りし  
明良洪範  
秀康御結城ノ家へ御越名跡相續ノ時ニ  
神君秀康御へ被仰合品々有其一ツ結城ハ代々  
ノ古家也家法定我七可多カハ始終不立新法守  
古法政法曰臣卜能談和ノ万ツ諫メヲ容我意ヲ  
立ル事ナク諸事曰臣卜亦碎君ハ臣ヲ不疑臣ハ



忠義ヲ不忘様ニ禮正ク大臣ニ對ル時ハ吾禮式  
ヲ守リ仁第一ニ士民ヲ惠ム古法ヲ守リ曰臣ニ  
政務ヲ任ル時ハ威勢日々ニ盛ニ下トメ不可成  
犯事大將ハ以礼人ノ服スル所有下又上ノ礼ニ  
習テ作法能キ者也其身不正時ハ雖令ト不行ト  
云ヘハ自ラ守ル所政道ノ第一ト可被思奢ハ付  
安キモノナレハ吾申付ル所ノ目付ハ家中ノ目  
付トハミ思ヒ給フ十眼ヲ付所ハ自分ノ目付善  
惡ノ諫官并士民ノ目付也朔望ノ勤家康ニ對ル  
如ク心ヲ實ニメ毎月怠ル事不可有是ハ吾家代  
々ノ規也三夕ヒ吾身ヲ顧リミルノ聖語此中ニ  
有ツ家臣目代ノ用事ハ近臣ヲ拂テ對話スルニ  
人先其上ヲ知ル類武道不案内ニ家ニ有事ハモ  
ルヲ以テ破レ密ヲ以テ成ルト云然ルニ佞奸  
大臣ハ愚君幼主ヲタラカニ家臣眼代ノ詞ヲ  
引出シ推メ沙汰ニ及類多ク近臣ハ眼代家臣ノ  
密言ヲ探ル輩ハ不忠佞奸ノ臣ト思ヘシ密事ノ  
モト安キハ近士惡情ノ者アリト知り玉フヘシ  
愚君幼主ノ不行路ノ非或ハ密事ヲ語り玉フ十  
トハ近士諫メテ是ヲ止メ常ニ行吾ヲ諫ルハ忠



臣也常々心ニ應スル如ク事ヲナシ君ノ心ニ叶  
ハニ事ヲ思フ輩ハ不忠ノ臣ト思ヒ玉フヘニ總  
ニテ主ニハ物ハ難云モ大成ルニ好所ヲ押ル等  
ハ器量無ハ不成加様ノ處ニ君臣心ヲ付テ人ノ  
善惡ヲ知り召連ル近臣結城代々ノ近臣無隔召  
仕寵臣トテ人ヲ隔ル事ナカレ士民ハ皆同胞ナ  
シハ分ル人ハナク以仁道賞罰ヲ明カニスル其  
ワサ士民ヲヒキユテ大綱也仁道ヲ惡ク心得レ  
ハ武門ノ失正道任道コソ武ノ本跡ナレ其業賞  
罰也賞ハ有功ヲ譽罰ハ有罪ヲコラヌ是仁ノ本  
跡ト悟リ玉フヘニ有功ニ品々有忠勤ノ功藝才  
ノ功軍功人ニ無之ハ希也其功ヲ能知ル事ハ眼  
代ノ正キヨリ知之其功ヲ無大小不空處賞ノ信  
也親族寵臣無貴賤其罪ヲ不許處罰ノ信也古人  
ノ物語ニ雨葉不去斧鉞ヲ用ヒトストアルハ  
能々心得正賞罰ヲ可執行ハル政務ニ急リ仁道  
ノ實ヲ忘レ佛意ノ誤慈悲斧鉞ヲ用ルカ如キ大  
害生ル事多シ故ハ賞罰ハ國家ヲ治ル釘クサヒ  
也世話ニ言處ノ家ハ末代主ハ一代ト云ハ代々  
ノ忠信ノ思フ所也旧臣ノ諫メヲ容レ捨我意家



門長久成ルト押返ニ被仰聞又秀康卿ノ神佐近  
士ハ今被仰聞趣ハ君臣共ニ能ク可心得也近士  
ハ爲第一ニ無表裏曰臣ニ和ニ勤功忠意ノ人ヲ  
見立面々ノ勤家中ノ鏡ニ成ルカ如ク心掛ヨト  
秀康卿御同席ニテ被仰聞ニト也

右、秀康卿へノ御詞書留三列大給ノ百姓所持

工府ニテ元禄年中大火ニ焼失ル也

柏崎物語  
伊豫ノえんあ司のち孫小島友近秀吉殿侯勢の面内より  
アリニ村お石おと小島今武家の臣よりハ御願しと申付度

武徳大  
天正十三年し酉皇朝ハ正親町院春正月 大神君

濱松城ニ居給去年北條氏直力兵下野國佐野城  
ヲ攻メテ佐野修現亮家綱ヲ殺シ其首ヲ濱松へ  
献シ軍ニ勝タルヨコヲ告ケシム十六日

神君岡崎へ出サセ玉ヒ二月濱松ニカヘリ給フ  
参列ノ諸將ニ命セラレ一國ノ人夫ヲ以テ吉良

柏崎物語  
ノ城ヲ築カセラレ

二月十日秀吉正二位内大臣ト爲リ  
落穂集  
是とハ自かゝ平の秀吉と名宗と申一を内府 任

友以後友宗の姓と申ぬ事申す也



柏崎物語

二月十日信権権大納言の成

秀吉乃醫師

天脈を伺ふ施業院なりといふ成事也

秀吉去年の冬よりして 神君を中川村に奉りて

中川村に成り候とて考信権を進免信権の流川に信守と

勘之信をお居年始の申候事候中上給義九極を秀吉

貴子に申渡し候中 孫中和原の極に申上信を成り候

候事と 神君申上候事候に候事ト馬平初年大年の

乃と考信貴子を奉り候事ト致上信に候事と考信の

心は遠く諸大名同様に上信に候事候事ト秀吉の候事ト

候事ト上信に候事候事ト候事候事ト候事候事ト

其亦不徳者を攻め候又申軍にて候事候事ト

秀吉根来山信法院漢沃田中畑積善寺安堵候事ト

此らテ所け名を付難免の者を流し候事ト是ハ是利の事

也古に候事候事ト規音堂の積善寺去年の秋に成

東西七十八回二重堀西の方九千二方三重堀西の方七千

万七の方百亦同北の方百二千同亦曲堀出九二千に亦

堀出九出亦右系山田テ二千坊根来大略三位坊丈丈坊

長橋の小千坊申院の方三万五千亦明院西の方西藏院



正徳院千カ木忠兵衛是永五合池乃勝士之旨拾摺人の致  
九子に百沢村の方より有是等防極子なり秀吉三力也  
紀列く此を致方の大軍也  
平押之孔入すゆき根来子洞法より根来僧侶を誘ひ  
弱きをせしけし野同前高野しは法滅し終るゆ  
つませしゆゆは孫根来ハ能大將なりゆき小勝ゆつて斗き  
け若く出山ハ有居け内周山是ハ清信之是永沙り居り  
秀吉方の細川より一帯之好孫七編葉六箇井頂其は任  
大谷形跡ゆき清沙任直孫吉換吉寺を攻る備生也之市  
中川有る傳り山右を渡の橋くまは長谷川有るゆき  
一乃あり根来市山ゆきゆに是深院編長院院下の根  
あり者之を門和泉坊鬼つ傍山坂小園好寺僧の極子ゆき  
是亦ありの附城之居市山ハ法僧斗居之好秀次之石  
堀を攻る長谷門を介是を見次漬積吉寺ゆきひ  
攻る城中ハ陸路ゆき本寺を攻る小寺ありゆ  
細川大膳なりハ石堀を破るぬ山の措り箇井頂其  
亦来葉内者ゆき大矢を射懸り此葉葉小焼付ゆ  
散り迎逢り焼死の者六百余計付者數ふ知積吉寺  
け通る有出丸の者なり不形く周山なり漸進ハ弘法  
の陵のハ新漸く是を打退り迎り者伊勢ハ永沙







海賊く洞——合と思ふ所を色を焼くなりは海くハを標  
梁の者を出し紙を中付合勢を標梁を出入り出たを田の  
々として樂し掛

九鬼右子——元仙石徳野新官陣——此中官新官形知ると  
日中光一の吳場と有ウカ信忠の承りて日中身一吳ヶ下  
とがくあり——いさあきいさあきの辱を承り——三方石  
解の神願

徳野の十津川——今もてもりそら徳野まで送る猪猪多々  
形の中徳野大方有り——中秀吉をそと政とく大軍に引  
出り——此地の海邊を引入て我信するんせ——めり大軍  
よしてて付と或るわけを——を掛懸——大軍押掛  
山を焼く湯の川さくろ形——焼破く——登敷  
——せ——出り妙く出り花の着切らさる紀列不沙平均  
よぬ紀列和泉を舟の乗長よと無大和和泉紀信三國  
の大石よなる紀列の長山を若山とぬえは成居城——

和泉の社人常圓——このホウ院か——礼よある是ホハ陽川  
を捲せぬ者有く徳野の山中有く——是列多——白旗を  
用と止

有川の和名本大木く十こりの院標の付付、中身の毒















筒の大サよして作らるる自牙すつて進上仕るを内葉  
をも下ろして妙よき進出應信とてそ夜半半の中夜お  
切切影爰中膿血流進出の作らるるハ声を上て候一  
信よ信く少時お候て中平念之

柏崎物語

秀吉よ申へ候をき一前よそそまの傾和ハそ方其候切  
あふ候り方ハふ妙なるあてりし想辨おあのみおふらへ候根  
来處山の根も方ハそ致してたよこし申も初ハ根来と  
空持候進た信よ可接ぬ今堂に候く一應候ゆれ候む  
まハ知く色てはらや候そ信よ信候き候て方ハ右の上

この野山ハ大周秀の音のせよあし相日のくくく極威よあされ

くく誰なりともは西山の女侯の顔て事くそものなく托  
物くく杉栢よ奥山重人として本念の客信有け人毎古  
あつやうなる候程きく一いれ色く一由候は仕よ野山首尾  
好てまきまき極くく一いれ由山よのり候候して別心  
中よ奥山寺よのよをまきまき信重人を信まきまきま奥山  
崇信の方ハ何くして何法を喜くとさうゆへそまきまき  
何く方と候あのかくく天由候中まきまきゆへ何く方ハ  
日くに勉め昌一崇信の方ハ月く候そ威をそ棄りり  
終よハ約十年後編く候くくくくえ福年中布を



紀伊守も東征勢を以て東國を以て裁判ありて中後  
よ乃りしよりゆりし者六百七十余人を獲りて送るに中山  
及靜澄早ぬ根来寺ハ初任長玄の時ハ遠方仕けり  
秀吉公の時中野山唯後中々をすりて中野中野  
右是く一列せん事を怒り欲討は長久之子の時分  
東照宮の由も有りて東列後和田を侵し攻るなり  
大岡怒りて終り攻せられ早ぬけ時先澤院を初根来  
の信徒殊列しきたる後巻を更し先澤を以て東列後初  
也

権現御へはくすりて中野院ハ之れ和久平秀頼へ寄

終小元失平思  
老人雑話

大岡の野山へ去信の時別駕をすめりて定み皆方々  
料理人烟りて去りて終りて中野山ハ白きま  
我別駕を合人事を知り持来り料理人其元の時  
と云実ハ持来り終りて中野山ハ白きま  
と云んて別駕となせり後中野の序中これハ  
怒りて云たりハカと云て中野の別駕を合人ハ何の  
細うゆらん我カハ一粒宛けりて合人の信を  
札を左根の者りて事ハ世ぬものとして怒り  
と也



柏崎物語

五月又人の敵を討つに必死に攻めし秀吉長と好孫七を奪つ

先年古作の武士有る時方の園白一傳傳へて遠の國を

中傳傳へ知を不傳ハは必死に討つと申あり遠を討

大細多し御由司也其子又京師へ上りて宗を継ぎて身

西司を繼いで代目し傳へんと長男我孫は其子也其子

大友宗禰方へ逃れ宗禰の聲を乞へて國司の地

長男我孫武勇を振起し其子今更まの城を以て攻め

秀吉一攻傳傳へて其子平均也

秀吉討つに必死に討つて其子平均也

吉子に其子根山と申す遠傳傳へて其子平均也

履正之也其子平均と申す其子平均也

其子平均也其子平均と申す其子平均也

其子平均也其子平均と申す其子平均也

其子平均也

秀吉園白の任一云河守極遠に位下少將又任一孫七

申將一或南十一日秀吉評賀の孫子と云

内有定家々の古今集と云ふ其後

其子平均也其子平均と申す其子平均也















見せしむるに追付入るまきししきまをゆく討てたてり  
詔ハ所をて焼拂しき輝りのトより付て擲つて赤破り  
云安房むく所を見切らま思板まを垣を結カ、川の傍く  
追付一カ所村の爲ま思切り石を發炮して赤破りして付て  
しままのまを甲佐の磨く安房うしままを殺すのめまあ  
云安房ハ弓矢の名人くお町屋ハ今思く擲しままをくお  
中人殺まらぬ一軍して高田方御るま付入るまをくま  
城を築られし進む難たハ町屋入る具を五カ將士ハま  
火を擲し焼付しせししし中某田七九帝もくく火ハま用  
詔の由振るま知るまあししてとらまま斗しと城下追付  
るま思入るま由一湯漬を喰てく何付くまをく付く  
何くまを飛してまら中人殺あつまもなま追追うる火  
る保七帝右軍の磨して引酒井ふ九帝斗今日高田を五  
斗し

お同の方へて引し思つた赤破地赤擲りカマり有えの及を  
て引し殺あ赤破りおの人殺た右カお殺七帝右軍の例の  
今この蝶井大指お今日纏りして居まを思くく赤の赤  
まをまらまか思く今この蝶の大指おを思て七帝右軍の  
何れ小居るくまをまら百斗集るま思はるもま思  
七帝右軍の威しるれ擲しし世にまら日まらる



うりし、ある平助見付、是迄、一城とて、中、白、  
く、と、海、を、お、ろ、く、を、ろ、七、市、古、事、の、人、を、を、よ、く、と、中、  
平、助、殿、す、ろ、平、岩、の、人、を、服、し、居、ろ、七、市、古、事、の、人、を、り、ろ、  
矢、沃、戸、石、の、人、を、之、掛、も、あ、知、殿、を、之、致、と、を、付、進、出、  
難、し、と、事、を、その、の、人、を、も、同、振、友、落、く、殿、し、て、引、難、  
吾、ハ、先、く、引、ろ、く、を、ろ、海、石、の、大、お、ま、お、右、ろ、く、色、を、と、田、も、切、  
者、の、長、退、を、引、城、く、引、矢、沃、戸、石、も、あ、掛、是、に、八、月、二、日、之、  
武、德、大、成、  
神、君、大、久、保、七、郎、右、衛、門、忠、世、鳥、居、彦、右、衛、門、元、忠、  
平、岩、主、計、頭、親、吉、二、命、之、兵、ヲ、發、シ、テ、上、田、城、ヲ、攻、

シ、ム、同、部、弥、次、郎、長、盛、柴、田、七、九、郎、康、忠、諏、訪、小、太、  
郎、頼、忠、保、科、彈、正、忠、正、直、松、平、源、十、郎、下、條、知、久、遠、  
山、大、草、三、枝、平、右、衛、門、昌、吉、矢、代、左、衛、門、勝、永、武、川、  
芦、田、ノ、者、共、等、甲、斐、信、濃、ノ、士、十、レ、ハ、各、兵、ヲ、發、シ、  
テ、相、會、シ、都、合、七、千、餘、騎、上、田、ノ、城、へ、押、ヨ、セ、野、田、  
ヲ、シ、テ、是、ヲ、圍、ム、城、中、兵、ヲ、出、サ、ス、參、列、ノ、兵、ト、七、  
怯、十、レ、ト、思、ヒ、ア、十、ト、ル、閏、月、二、日、城、ノ、二、ノ、丸、逆、  
攻、入、ケ、ル、火、ヲ、放、タ、ニ、ト、云、ケ、レ、ハ、柴、田、康、忠、是、ヲ、  
留、メ、テ、曰、ク、火、ヲ、放、タ、ハ、敵、急、ニ、擊、テ、來、ラ、ニ、然、ラ、  
ハ、我、カ、兵、城、中、ニ、取、リ、コ、メ、ラ、シ、出、カ、タ、カ、ラ、ニ、ト、  
云、ヒ、ケ、レ、ハ、放、火、ノ、事、ハ、ヤ、メ、又、真、田、昌、幸、城、下、ノ、



砥石町口ニ柵ヲカマヘテ弟時田出羽ト高月備  
中トヲ籠置四百余騎ニテ是ヲ守ル嫡子源三郎  
信次後ト伊豆守ト称ス城ノ大手ノ前ニ兵ヲ備フ昌幸八  
百余騎ヲ帥ヒ町ノ横小路ニ柵ヲ設ケ路ヲフサ  
ク郷民共ヲ集メ紙旗鉄炮ヲ持タセ谷々ニ分ケ  
置ケリ参列ノ兵進ニテ町口ノ柵ヲ攻ケレハ時  
田高月イツバリテ坂中へ逃入ケル参列ノ兵歎  
ノ敗軍スルト思ヒ備ヲ乱シテ追ヒ行ヲ信次二  
百余騎ニテ進ミケルニ参列ノ兵進ミカ子列ル

ヲ見テ昌幸八百余騎ヲ以テ関ヲ揚テ横小路ヨ

リ騎出テ急ニカハリケレハ参列ノ兵防ケレト  
モ叶ス引退ク信次及ヒ時田高月等城ヲ出テ追  
ケレハ参列ノ兵横小路へ退ケレト柵ニテ塞ケ  
レハ叶ハスニテ味方多ク討タレ又敵兵町ノ外  
へ出テ備ヘケルニ味方七備ヘヲ立レトシケレ  
ト引立タル勢ナレハ止メカタニサレト大久保  
忠世平岩親吉フミ留ツテ矢炮ヲ放テ敵ヲ防ク  
忠世カ家臣本多主水親吉カ家臣尾崎左門兄弟  
殿ニテ引退ク昌幸跡ヲシタヒテ進ミケル郷民  
ノ伏兵共七谷々ヨリ起リ攻カハリケレハ参列



弓鉄炮ノ足輕共敗軍セシト見ヘケルヲ本多主  
水馬ヲ返シテ尾崎左門ニ味方ノ兵敗シト見ヘ  
夕リ如何カセシト云ヒケレハ左門カ曰足輕ト  
モ下知ヲ用ヒサル故ニ敗軍スヘシ我等ハ討死  
ヨリ外ハ十シト云テ兄弟共ニ歎ノ中ニキリ入  
テ討死スコレニ依テ参列兵死ヲ免レテ引退キ  
ケリ鳥居元忠平岩親吉藤森ニテ引返シテ人数  
ヲ備足輕ヲ前ニ置テシキリニ鉄炮ヲ放ツ昌幸  
一方ヨリ戦ハ利アルマシキト思ヒ信次ニ命シ  
テ横槍ヲ入レシム信次五百余騎ヲ帥ヒテ脇道  
ヨリ横ニ攻メカ、ル昌幸モ進シテ戦ヒケレハ  
元忠カ兵士臣海孫七郎小原孫介中野太郎八大  
沢竹兵衛同甚九郎鈴木又五郎同新八等討死ス  
歎ノ方ニハ上松景勝カ加勢ノ兵モ後ニ進ミケ  
レハ元忠モ防カタク引退ク昌幸勝ニ乘テ追ヒ  
ケルヲ大久保忠世十四五騎ニテ踏ト、マシ家  
臣七部藤吉本多全水弓ヲ執リ畔柳孫左衛門鉄  
炮ヲ放テテ歎近付ハコレヲ防ヒテ加賀川ニテ  
引退ク城下ヨリユ、ニ到テ参列ノ兵三百余人  
討シ又忠世猶留マツテ退カス全ノ蝶ノ指物カ



ハヤクヲ見テ弟平助忠教及ニ合セ忠世カ旗ヲ  
川上ニ立ツ敵一騎來リケルヲ忠教鎗ヲ取テ突  
倒ス此戦ニ保科正直モ戰ヲ勵シ家臣數多討死  
ス諏訪頼忠先ニ進ミ真田家士柳沢采女ヲ討ト  
リ家臣多ク討死ス三枝土佐守昌吉同源藏守英  
内河七左衛門正吉等甲別先方ノ士ニテ河中ヨ  
リ馬ヲ返シ高名アリ大久保甚右衛門忠長中寫  
与一節ハ忠世カ備ノ殿リシテハハ防戦ニ  
敵ノ鎗ヲ多ク取り追ヒ散ラズ忠世カ家士桑原

源助ト云ケル者及ニ合セ敵一人討トル此戦ニ  
ヲ濱松へ註進ノ使ヲ遣ハシ忠世馬ヲ乘殺シ候  
間御馬ヲ并領仕度ト申遣シケレハ源今ヲ御前  
へ召シテ忠世ニ御書ヲ下サレ御馬ヲ賜リ源今  
カ功ヲモ賞セラレ御金ヲ賜ハル忠世カ家臣五  
人ニ感狀ヲ下サル松平十郎左衛門足立善一郎  
木下隼人木多源藏松平弥四郎天野小八郎十塚  
久助後藤惣平氣田甚六郎江坂茂久天方喜三郎  
等忠世カ旗ノ立タルヲ見テ馳セキタル方々ヨ  
リ味方馳セ集リ百余騎ニテ岡ニ止ル昌幸モ川  
端ニ陣ヲ相隔ルト三十間ハカリニテ各鎗ヲ取



テ對陣ス昌幸カ家士日置五左衛門ト云者味方  
ノ軍中ヲ通りケルヲ足立善一即鎗ヲ抱テ突ケ  
ルニ鞞ニ中ル日置馳セ去テ河中嶋ノ加勢ト思  
ヒ歎ノ中ヲ通りケル危キト也ト云テ馬ヲハヤ  
メ逃ノヒケリ此間ニ味方ノ兵集リ三百余人ニ  
ナル忠世真田ヲ城へ入マシキト思ヒ鳥居平岩  
保科カ陣所へ使ヲ遣シ我トイマ川ヲ渡リ敵ヲ  
城へ入レマシキソ各路ヨリツキ玉ヘト云ヤ  
リケレハ鳥居元忠ハ吉田ノ臺ニ備ヘテ居ケル

カ使ニ云ヒケルハ味方ハ敗軍ニテ氣ハ屈シタ  
ル兵ナリ敵ハ機ニ乘テ川中嶋ノ加勢并城中兵  
大勢ナリ川向ノ敵ヲ敗ルハ安カルヘケレト新  
手大勢進ミ来ラハイカ、スヘシ敵川ヲ越テ来  
ラハ討滅スヘシ味方ヨリ川ヲ越テ卒ルニ進ム  
ヘガラスト制シケリ平岩保科モス、マサリケ  
レハ忠世モ川ヲ渡ル丁ヲ止又真田カ散兵モ多  
ク聚リケレハ兵ヲ引テ城へ入ケル真田カ川ヲ  
渡サ、ルハ忠世川端ニ備タル功ナリ此ノ役敗  
軍ナレハ首ヲ取ル者モ十三酒井与九郎一人首  
ヲトリケレハ參州ノ者トモ崩口ノ高名トソ褒



メニケル  
柏崎物語

惣と日大久保多指平岩等合て大久保ハ何とも息多指平岩  
かく越方の人取何れ息多指平岩大指平岩大久保岩田  
修列指を引違て馬田う枝城マレるを攻る馬田是を中海  
野の町へ出以平力予のり色うて渡りし出の海をて五切  
かう七帝七帝ハ押をてう攻りしれとも二見がく進ハ休  
く馬田をえを指平岩のり何とも二の目を見をて攻り  
後ろを渡り指平岩のり何とも二の目を見をて攻り  
中月七九帝右あ人の屯場へ引右に指平岩七九帝  
何のり

高威をとりし見し指平岩のり何とも二の目を見をて攻り  
其月人取を引上り七帝七帝も七九帝も後を立人取を  
引上りし上ハ渡りし中上中上馬田等もさく一軍ハさく  
一ヶ場を五段をて待りし大將代りし  
おしりて大指平岩をて持りし中合也後指平岩見事  
時方少くは輝せし合亦日馬田海軍ある青馬田人取  
出りし内ハ安房も難く出りし合合能方く馬田う陣へ  
付て抽り七九帝事取散り戦馬田う人取馬田う後  
て馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う  
馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う馬田う



是水討に去るに何れ我安房と父子先一保に城申しし大勝  
出づけ方落しし名有

武徳大成

長盛カ家士松山惣藏所藤内千野十介内藤平太  
望月七郎左衛門大塚兵右衛門小鹿又五郎上松  
弥藏小泉次太夫等谷最先ニ進ミ戰所藤内千野  
鎗下ノ高名アリ松山惣藏諸卒ヲ下知メ走リマ

柏崎物語

大久保七郎右衛門の事にて見まはれし我七郎右衛門の事居平忠一

是れもな一ぬりし一勝をみち後一を治はる同又子を

討をく流し去りし是れ其田も人殺し上り

落穂集

城持ま田能きし城兵毎々勝しきく城候村におまらる

守て大原安女市おまの願多井保多助其政村平因坊も原

守け上り人上田表へ所我先達をけり向軍勢は城地

を引取し世同道成して其由をけ修治り方一人は者

上田表へ後向して其の地をけ修治り一人は者

城子見方其城の事し一修治り一人は者

城子見方其城の事し一修治り一人は者



あつてはくく人気の心もさうさうなまはさうな白き夜に  
向きの煙ハ我ハ致まの居白ひ是物の少煙を一心致集  
まりては海にさうななるまは物まの玉のさうなまは  
いづまの道さうな今少見合さうなまはさうな海に安房さう  
すうなまは白秀さうなまは揚兵の煙を致さうなまはさうな  
秀さうなまはさうな戦後まは白山の煙さうなまはさうな  
上田の煙に加勢まはさうなまはさうなまはさうなまはさう  
のまはさうな船さうなまはさうなまはさうなまはさうな  
まはさうなまはさうな上田の煙まはさうなまはさうな  
押さうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
のまはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
柏寄物語  
小澤まはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
河房まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
片振まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
加勢まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
船用まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな  
右馬元まはさうなまはさうなまはさうなまはさうなまはさうな







こて越後落水ノ城逆着是ニ逗留ノ間ニ景勝同  
別系井川ノ城ニ居玉フヲ呼マセ對面アリ秀吉  
公ノ方ニハ石田計景勝方ハ直江計對面ニ時密  
談以來入魂ニ相究リ早速秀吉公ハ越中戸山へ  
飯リ玉フ大敵ノ中へ三十八人ノ雜兵ニテ來リ  
玉フ事強將トヤ言ヒ大膽大志トヤ言ヒ前代未  
聞ノ事也

柏寄物語

九月比志田を系勝へ申渡し一系勝大軍よして加勢よび  
し一係中秀吉加勢よびて海軍よして志田を赤松人へ致す

進給一申小引上り大あかしの戦ひに城形はかく

あしききり城も中も討ちおろ弱ふりして逆さす  
布々逆さす大敵一に返し志田へ人致を逆さす  
く申代此場へ川を流し人致を川に流さす志田あしき  
顔人致を川に流さす流石を志田の士を格別と珍さす  
相違ひし中搦ふ城志田しきりして居る上取  
加勢し向る天正十二年志田安房中家来しめ  
松平物語  
天正十二年し商 家康公は十に代中歳位列小縣致す  
田安房を居城上田へ申人致を向ふし人へしし年  
七し物多し相違ひし大なる保さす申し保科は心又志田



流防号段内膳下條新久大系尾代城中書之我土佐守其  
田并井伊多於少捕名代本侯土佐守等之計紀多先年小  
條氏重下之御一和の時兼好の御地在氏重分る別海一  
於小石上列作田城を少條へ海に應る中其田方へ  
於重下之御一和の安房守子用計作田城ハ 家康云々中  
清く於於地への御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
家康下之御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
下御五下之御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
事下之御一和の時兼好先を以て御五下之今安

上田の城へ御一和の時兼好先を以て御五下之今安

御一和の時兼好先を以て御五下之今安

是を事下之御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
さうさう引退く事下之御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
もななく海野町迄乱入城中の御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
多う御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
小井川けあめれさうさう御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
とさうさう御一和の時兼好先を以て御五下之今安  
於て御一和の時兼好先を以て御五下之今安



市にありて遊楽をすこし百餘年付きたりて卒せし物な  
る保せしを事の末相をさく友の意をさく女新しきと  
合せしとくさしたれ引きたれ歌くそと川中流に加藤の  
人殺二のふふあまうたりとさすまをりく敗軍  
して加賀川をさく岩下をさす大くさくさくさ  
くさく飛彦若連のふふ未だまは後陣より引きたり  
戸川の城に志田源三郎後陣軍号同源流三郎後陣軍号けん  
さふさふさ押出り深居の基くわくさくさく進をさく  
とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

出りし加賀川をさす飛引退く相面吉田の基くさくさく  
敗れしの子をさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さたり志田と川のさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
くれさあまの気もお引り退きさくさくさくさくさく  
働らあり志田又押出り八重あふ対陣しりさく  
せり合ありさくさく志田をさくさくさくさくさく  
系勝が加賀河中流航新のふふ物さくさくさくさく  
おくさくさく味方さくさくさくさくさくさくさくさく  
備まらさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



とて夫より諸勢引さ致之

故人乃信田を付之何勢を二万余と云志田ハ其付信田  
上田有磯合多し九万石の事云致御上田原色也  
陣五上意の紙中候如小志田云其候引之由入の名  
と使小取来致相之く鞠子持城多海野之在事之を  
中多之日の名由得可於此候荒た城内之  
急を去る酒一平令之其候之及之致の由中亦小  
之日お泊如小又志田中候多城申之  
家中之事云其國の候り持親を引之き其の如し

一 於山を度十方を去るひう同年未の事  
乞食の脚少成持之く其生涯の恥辱是云由之  
好男けとそれく一り知をかくりつ方之由  
小は安り其今日之日也之を由得之持此中  
中を理を之  
依之各諸將多之其合多志田多甲列家  
業此切者武果時人云  
之ん准押多事云其た  
各志田中候之理之我し人  
一 此歌の事田何程の事



先方有傳方の自慢有煙海と申す一と云々之は其一也  
りあり押寄りし所より伝へて又之旨を其れに記し  
しりしと志回思ふ所も紀しし根津矢沢處を尋  
る所戸石の城ありしかあり小人を入道するを伝へり  
お島を定洋儀を用く後又使をして中を尋りし  
る所甲の妻よありたること新巻に傳九時方の傳小  
りぬも就るものも云を要し新巻に傳ありし傳成りた  
りぬもゆゆの自認ししつゆをいふことしし官判冷  
刀は合お極りし城申すてかしのをさるし一戸川官申  
西の方の備將大將よりいふことあり大軍を敵ししと云  
くけ志きりし小是を賣書のことし城戸石の城に  
の別業ありお島と云ふことあり其れ山と云ふは傳  
ありしこと此の事なるとしし傳記を敵ししけ矢さけ  
ひをるし一其後右石の終を之傳のししし小島より傳  
りし其軍勢と云ふことあり賣書を引退入と云ふことあり  
幸無相をありし城戸を再りし宛てお島と云ふ傳りし  
又其れ志回思ふ所も二男ありしをよ秋葉崎へ由はせ  
川中傳りしと一万余石を承領す是より傳りし城後傳後  
清きりしと云ふ



之列少皇坂の七年滄多信長記小頼〜志津御の七年  
多大同元年の事同七年滄多何事も記と云ハ信長を人  
の白し〜と信長〜と世人〜と或時三井寺の事源多  
此年甚く〜と信長〜と終日御の事源〜と極ふる事  
其時〜の事人信長〜と書付多〜と初め同降ハ  
天正十二年同八月の事〜と二日此合戦〜と多信長若忠の元  
忠〜と小見孫七滄を合せ同降ハ丸山の城〜と長幼同降ハ長  
盛〜と〜と信長〜と田安房多昌幸〜と合戦の時長幼同降ハ  
源人小藤又五年〜と書付ハ奥山新六所〜と友内と友平と

内膳小藤又五年〜と書付ハ奥山新六所〜と友内と友平と  
多降下此〜と名との由文云ハ〜と小藤又五年〜と書付を合せ  
その方〜の事信長〜と小藤又五年〜と書付を合せ  
元〜と小藤又五年〜と書付ハ奥山新六所〜と友内と友平と  
降ハ長

九年  
記

武徳成業卷之二十二終



續開談

伯耆守加藤正脩編

秀吉四國を攻て昔曾我孫元親と下一十ヶ年以て  
 取河波潰波伊豫と波収一河波の國と峰原伊豫國正  
 勝と瑞呈別河波等並攻と及び月一石赤松次郎別房に  
 瑞呈と瑞呈より潰波國他石槍と清秀久津領月二万石十河  
 氏初と瑞呈保と揚子十河乃城と作一石領より伊豫國  
 三十五万石小早川左衛門督澄系と給り月二万三千石安國と  
 惠獲と宛次三千石徳岳氏一万四千石久留島氏萬石の  
 地一と澄系のお徳とと仇い昔曾我孫安堵は時時と



賢仁愛と云く國政を施す中玄士の血脈の者いざ  
人として軍役に随ひし山士は世々持事所の山邑と爲り  
て各備するの田吏の勤を別百姓として事有付は馬  
人臣と勤をともえ礼山士百姓の之宗と立たるの事とあはれ  
身も貴と云ふと云え礼の勤の上をたすめ福をとりと云  
ふも人筋もあはれと云ふと云ふに中をたすめと故家旧姓は  
あはれと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
旧主と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

隆宗の連枝吉川段河智元等はは九列と遷治せは後赤の  
正十四戌年豊後國八押浪を十一月廿余の歳とて病死申入  
翌年九列治まよ入隆宗の伊豫國と改め後赤一帯後後の  
月三井那之系那と賜ふ之地博多の町年貢の秀吉の爲に  
也修く吉川元春の息元長は後赤と賜ふべきよし之れ  
と云元長日向國都那津中にて是又病死如くに父子  
を續き死云と秀吉公がしめりし人元春の末弟後赤  
秀包も後後の月久留目城賜ふ元春の遺跡は輝元の  
所月よりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
幼解中隆宗と持と云九列より帰陣のと云赤石ヶ岡  
より秀吉より正徳元年ぬ



右吉川廣家朝鮮救度の戦功以て伯列等至出雲の月  
之郡隠岐一帯と控えて藤列石列の月也頗る偉く頗く  
雲列畠田等も其城冥ヶ系の河も田忠仕以て可也毛利のお家  
千長一圓防と 権規様より懇命の地よりしてきて  
吉川は右兩國の月も食邑許頗る多きを伺ひある  
郡邑をさるるらるなり

安國寺ハ澄系の子替少後希輔と郡移りてその後継  
日渡海ハ澄系のおちめ殿切莫大之澄系帰朝の後  
大政所の甥合容殿と澄系の養子とせよと後希と渡

澄系ハ東福寺の住職とあり又後希より六百石とた  
すりて澄系冥ヶ系の没も死刑に決せり  
按此の二條後の  
之系にて其ま

う後後のこ  
系河の故を  
感状記  
秀吉肥後ヲニツニ分テ和藤主計頭清正小西撰  
津守行長ヲ封セラル行長ノ領分天草ニ一揆起  
リケレハ行長カ居城宇土ヨリ天草ニ馳向フ清  
正同國タルニ依テコレニカヲ戮セテコレヲ攻  
ム一揆ノ豪酋大山弾正八百計ノ勁兵ヲ前後ニ  
率テ直ニ突テ出ル前日ノ戦ニ弾正カ長子ヲ討  
レ且憚且憤ケレハ今日身討死スルカ子ノ仇ヲ



報スルカト一途ニ思ヒ定メカサヨリ撃テカ  
ル行長清正ノ先手突立ラレテ弾正勝ニ乘テニ  
三町計追付ル其勢甚夕奮戾也清正冒ノ緒ヲシ  
メ直シカ足ヲ踏テエイ々ト呼ハル声衆人ノ耳  
ニ徹ス壯氣面ニアラハレ先手ノ敗軍ヲ余所ニ  
見テ其所ヲ不動旗本ノ兵是ニ勵ルテ勝ホコリ  
タル敵ヲ追返サントス清正自弾正ト鋒ヲ接ヘ  
加藤清兵衛ハ後備夕リシカ其部下ノ士卒身方  
ノ切立ラル、ヲ見テ驅合サントスルヲ乘廻シ

ヒヲ料ル彈正カ清正ト鋒ヲ合スルトキ爰ソト  
云マ、ニ咄ト喚ンテ横サマニカ、リ旗本トサ  
シハサミ撃テ遂ニ彈正カ首ヲ斬ル清正ノ寸文  
字片鎌ヲ掛テ折レタリシハ此時也後述此片鎌  
ヲ持鎗トシテ家ノ美目ニ具ラレケル  
武徳大成  
九月 神君駿府ニラハシマシテ城普請ノ  
一ヲ仰付テ參州田原ニ特シ玉ヒテ又駿府ヲ巡  
見有テ濱松ニ歸ラセラル  
柏奇物語  
此有 神君候松ノ御中歸ル根東の根東大膳  
マミツキヤ電音院ノ外太勢候松ノ系上北百人信ノ系



る是ハ叔敷重房ノ伊奈書紀ヨリ作付後心立ニ成  
ル所ナリト云續後心作付後心出ク二條ナリト云以テ  
伊奈ノ出ル所重房院ニ根拠ナシト云之ハ何レモ以テ  
ハ別段ニ云フ

十一月十日石川伯耆守昌清ノ城ト云退き秀吉是十石  
ヲ以テ召寄ルハ以テ智勇或切並ナキ者ナラバ加給ハ  
以テ大逆臣ノ不義不道者ニ成

神君所存知ニ當時昌清ノ城ニテハ作付  
ナシト云通之

落穂集

清ノ城ト云石川ノ城ニ立城ル別松平源次郎重房松平重定

通之方(家人天師又重房)ト云ハ一様向ハ申於テハ  
秀吉公ノ心ナリテ城ヲ我亦宜取持テテ名ヲ送リテ清大  
五郎重房ノ目意ニテテ依テ信州小笠原氏通之方  
ヨリ召寄ルニテ召寄ル人質計ト云連ハナリ  
或時秀吉人御使ヨリ石川伯耆守ト云是成頼友八ト云是成  
然ラズモ御進相可云是ハ以テ馬次重房ヨリ取替中重房ハ清  
テト上ル伯耆守清是城ニテ清云トト上ト云御取上ト云  
以テト御取上ト云迄以テ心恨ナキト云又ハ作付後心ヨリ  
伯耆守ノ重房ト云之ハ重房ト云石川伯耆守ハ重房ト云

續閑談



尋山成敗可成との候申て尋山の老いなると申すは物言

乏りの砌りより夜八節は所迄の中なり

一番は欠けあるは馬の五法して淡松へ仕進するは馬の想

欲新次郎一生迄と淡松へ人質と云ふ及と新次郎と

と云ふは下は馬と云ふ

源次郎名代居て忠臣と云ふ人質と云ふ及と新次郎と

淡松へ仕進するは馬可成と云ふは馬の想

源次郎のりよりの居て右通うヨキウノ松平之後嗣

領知と云ふ今ある處の祖之ツカウツノ松平之殿助園有て欠

小笠原系之御人質と云ふは新次郎の

石川文政へは十石の御法をり

の心あるを屋敷にせり

身も氣もついでに御法をり

之世より分派候御用は不足との

十五日

神君より石川より御法をり

擔之候御法をり

落穂集

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり

石川より御法をり



を都三河に下合ひおく清き

十一月十六日

家康

小幡友

柏崎物語

十六日正午清は兵入るを以見也成三列の清軍は久  
有る一番より敵兵来るは伊藤義元領知しゆる月夜清  
次吉原とて石川(山)に馬と十清と清附属と成  
相之河原に作れ是清の清敵は伊藤は作れ主敵は家  
康親知し伊藤義元は居る久保七郎右衛門(伊藤使を

清軍の了り方信玄の子は月夜清は四郎右衛門(甲州)  
再殺して清軍を可殺し家康了り之信州小室乃  
の敵松平源十郎未若家之七郎右衛門と名取し清軍を  
りウホウと名取之家康甲州へ可入何れ自分退き清軍を  
誰より可殺しとてし清と云者なり久保平助清軍を  
殺す清軍はしもも亂るる後とし七郎右衛門は信州  
らに清軍十郎右衛門未若家なりし清軍はしめて七郎右衛門  
是清軍来る上枚は美田小室系(か勢は急きしとて若かり  
りしは美田小室系も小室(ありしり不敵久保平助ジツト  
小室とてし居る信州(は難し是清軍(ゆり平助は河死と



定めし居る武勇と名人感する

武徳大成

石川伯耆守岡寄ヲ出奔シケル後参州ノ城主濱  
松へ人質ヲ上ル者多シ本多豊後守康重モ次男  
次郎八紀貞ヲ差上ケレハ

神君御感ニテ

先祖ヨリ代々忠節ニテ別心ナキ者ナレハ人質  
ニ及ハストノ仰ニテ紀貞ヲハ祖父廣孝領所へ  
遣ハサル伯耆守同心八十騎ヲ内藤彌次右衛門  
家長ニアツケ玉フ本多作左衛門重次ハ伯耆守  
力志ヲ悪クテ大坂へ人質ニ遣シ置ケル嫡子仙

年代ヲイロハテ参吉ヲクハカリ盗ニ出シ参州工

引取ケリ  
柏寄物語

廿一日三州の諸大将と石て大久保と石川源兵衛と  
松平作左衛門大付と石原と石原西尾の城へ

天保七年七月

現様ニテ法年若くは成り産出より教夜の時陣

了ゆきしは人傷少なり於て所合致追余より出合  
此の所何流の御軍法と御用はされしと云々  
の所よりより所見合致す所下知りしと云々  
所勝利は海に  
助くまはしと云々然る處も天正年中尾州甚久より終る  
豊臣大筒秀吉の大軍より向ひ進みし小隊の事方と云々





大木如門將軍とせよといふ所世後近年の事なり豊臣

家と 徳川家の大合戦ありて不叶と世とよ於く

考ふ所治は徳川中流人の彼程よく其定語は有く

いふ迄なる處は三州豊後之城を石川伯耆守に討たれ

所家次出奔有く大岡一徳文は有 所家大中の諸

人存いふ石伯耆守殿を討てし事記中とあり申すも御井

左馬守石川伯耆守を二人の取をいひし事と御先とて設

されし身の或仰りしとすれは云 所家の事人

とと可なりと比仁敵方一降参と有くは 所家の

事記の事記に記す所家の敵方へた如き事ありし事記に記す

あきの日のぬけたるはかたの事なりと有るは云はれし事

いふなり 権現梅は石伯耆守大木の城と有る事

記する所梅は石一松と有るは徳川家と有るは云はれし事

中の諸人不審と有る事と有るは云はれし事と有るは云はれし事

州の事郡代を長彦(所方)に記すれは信玄時代

に記する軍法等の書に記す所信玄の用ひし武蔵玄奥の

松竹の事ありし事と有るは信玄の用ひし武蔵玄奥の

山松の事ありし事と有るは信玄の用ひし武蔵玄奥の

有人と有るは信玄の用ひし武蔵玄奥の







と云は七高尾の城と云はるるをいひなりい多岐原なる  
ト云は一命と云は城守の命なり作事進んで思と上  
る由多岐原の事と云はと云は皆一回なりぬき  
馬と云は高尾の城と云はるる意夜可おる秀吉と云は  
よるいひなり修と云は帝と云はなりい多岐原の事  
一命と云は高尾の城と云はるる意夜可おる秀吉と云は

以下 網  
續閑談

所為象の侍大將八人の事大之保士而志願の忠世と所分  
國の大小人衆と集て事の成之大事の事矢亦い入契

酒井直房の所忠次と云はるる人の教清と云はるるに由て軍  
の高拂の大將東三十三ヶ國の武刃の仁と信長稱義  
るる將りれと一番合戦の持之大須賀と云はるる馬の意  
もみ千の人数清と云はるるに由て二の味の大將と云は  
平八忠勝ハ是もみ千と云はるるに由て右一二の勝負  
と云はるる一番合戦の成敵の旗と云はるる勝負格の侍  
大將之柳原少将と云はるる意夜可おる秀吉と云は  
張の成敵の旗と云はるるに由て是又勝負格の軍將  
と云はるる柳原少将と云はるるに由て是又勝負格の軍將  
千代虫と云はるるに由て是又勝負格の軍將



河内勝利之戦且平岩七之助視吾志を乞ふ二千と云ふ  
も大勝て二修り屯し河内後結く望む不亮将軍  
世に名を立ししと不働勝利石川日向守家成子実分の  
のしめし勝り進み遠敵将軍り柳井家成の永禄七年  
三列没樂郡一の字の城より五百助と云ふ能指ける  
了今川氏実二万ありと云ふ 権現様二十三  
敵の河内之終二千始めて遠征して河内遠之成実を  
武田信虎母八千の人殺と有て是と云ふ人として遠列  
元月より云々

河内勝りて百助と云ふ連も是も河内の城へ河内保軍より取  
河内家成遠敵として二のまゝして八千の敵と云ふ  
り一跡八と云ふ會戦して勝り後と云ふ  
権現様日本を双の名將と世に仰るなりと云ふ  
目利家成一人殺あひなふと云ふと探之探むる三隻も此  
より九箇の妻麻道は父の人殺と云ふして河内元の因  
右等遠列甲列佐列遠列三列五村の河内國と拂  
河内之千の惣河内殺傷の松子侍大将より一室の世師  
伯定は天文十二年秀吉と云ふ河内戦可きと云ふ評  
策をける河内守家成の言ふ本音河内も多佐列佐云  
と云ふ河内守家成の言ふは信玄の軍法河内守又河井







了る之と云法乃ハ軍隊の書籍可改出シ此法并屠畜  
ト甲陽ハ之等々彼國の奉封成敗言馬ト正一冊余を  
らる於是信玄様ト人蕃六伯の作法の書或ハ元  
折井市江邊ノ次昌官出之又分國江邊の法度書信玄  
并典厩信整々九ヶ条の書世二冊江并念之計官出之  
且元龜二酉年乙亥の始定テ信書新原基ト出之  
或亦ハ隅ト就トす信書侍作の書亦同ハ元龜光寺流山  
和為官出之右ト書夫  
信和ノ取成意馬ト稱之令却ト云之云云江後中橋

是月廿九日大地震ニテ五畿内東海道東山道北

陸道神社佛寺民屋數多カタムキ崩レテ厭レテ  
死スル者幾千人ト云テ數ヲシラス大地サケテ  
大水涌出溺死スルモノ多シ明年二月ノ頃マテ  
日々地震ニテ其上饑饉ナレハ人々草ノ根ヲホ  
リ海藻ヲヒ口ヒテ糧トス疫病ハヤリテ死スル  
者多シ

落穂集

同年十二月信州方ヲ於テ小笠原右邊ト交々ト年々  
同國遠の城ヲ攻討シ廢城之保科洋正白直拒き戰テ  
勝利トシ敵多ク母傷テ貞景收之此ハ信州邊



尸より河原にありし一河感状系河腰物色永く記す

柏寄物語  
是月 長尾孫兵衛元正河原河原松林寺に居り正俊山口

勤王清雅朝加友源を布成之は家人に居る出松平吉盛

臥池に成毒死す

上月より長尾吉景の喜子信長の末子ツキ丸今日十日死去

羽柴中納言吉豊長竹勝り

勇士一言集  
今年秋小原成政と旗本義直と下野國大和国友屋と

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて

しりあすて旗陣のいりるふ合戦となりし二百騎出陣

の足輕せる合戦なる成政の陣より足輕控をまゝと名をきて



是下度一りの控更に信しむるに深く思ひ奉る由の  
御芳志よこしてし度とて清治じく長平治をうきて  
是とて一りたる扱控更持るの負とて一り出てもよふ  
こゝろをいひてし度とて清治に帰るる歎も味方も感しり

柏寄物語  
天正十四年 御加例五献

十日 侯松より尾崎へ所入と成

十三日 佐藤より伊予布長益時葉下徳上幸始し控  
へしとて席より上洛の事と又へしとる

毎度おすすとへきこ回事へす御さるかき御てかき  
無用と 上意

同日 武門前へ御感状とて御真同御働の御慶儀なり

大新十師に御感状も武門前書状と送るも人共御分  
の御申へかるといへり

神君若良へ御感状又の上へ御使ひて御和漢と

へまの御感状も御感状とて御感状とて御感状と

御上洛の御感状とて御感状とて御感状とて御感状と

御感状とて御感状とて御感状とて御感状とて御感状と

御感状とて御感状とて御感状とて御感状とて御感状と

御感状とて御感状とて御感状とて御感状とて御感状と

御感状とて御感状とて御感状とて御感状とて御感状と















つ耐母むひくくくは度行等可有多ふ之條斗りの  
行好可有元歌お遠まらぬい條之誓詞とを底と流  
を流傍中より出しつる右之條一くお遠なり一罰文あ  
る所好の之條と有る言の誓詞おとお遠なり一流を流  
半生一誓詞紅家香香々誓詞判元とらんお遠に之條  
此誓詞とはる一相ちとぬより一遠る有る言甚後く又  
一有と歌の源と流を流おの流を流納納の心條と所  
より上と高月と三月とれと年月四月より一無と  
下流とより遠  
神君易詩一河内河内九日忌流より

可於流川天神自可保とて作出有人あり一出まより一

第百  
續開談

織田源お流を流と高詩二日連而一ぬ後八後井  
為三流基岡者多し二月毎日は溪松へ集るに板別心統  
候の難子難波義長六小教也命又七五教苗春日を教  
逆水流を流流親世と之節連の所と逆水流之節一是日  
宗雷代りの連之脇の流おと也命昔四節心科流  
節次より田村 名徳虎橋所八瀬の所かくのこ  
を教い義湯流仁と改じ之は松風義長六也命又七  
之後之方流候 家屋様流所流を流永井右近











此の如くは吾の如く一まの対い壞目の法藏の掃捨の如く  
中少の紀傳の如く氣の如く印の傳と其破るの角も亦し  
一上流の如く後父の如く父の子一其後所達心より中少の如く  
或は父子の如く一其後所達心より中少の如く  
後父の如く父の子一其後所達心より中少の如く

或政ノ世ニ至テ六十有余ノ遍參僧關東ニ赴ク  
時相州小田原ノ驛亭ニ宿ス制札ヲ見テ嘆息シ  
テ北條家モ末ニナリ可亡ノ端顯レタリト云目  
代此言ヲ聞テ往テ町奉行ニ告ク町奉行奇之テ

彼僧ノ所ニ使ヲ以テ可申談事候間御苦勞ナカ  
ラ私宅ニ來臨アレト云遣シケレハ老足道ニ疲  
候休息シテ後ニ參ントテ暮ニ及ンテ來ル町奉  
行出逢テ先辭儀ヲ述茶菓ヲ出シテ後養レハ爾  
々ノ出言アリト申ス者ノ候實ニテ候ヤト問客  
僧實ニテ候ト答フ制札ノケ條非理ノ事候ヤト  
問皆非理ノ事候ハスト答フ其時町奉行貴僧定  
テ傳識ナルヘシ非理ナクシテ亡フヘキ事昧暗  
ナル吾儕ノ所不辨ニ候願クハ其道理ヲ説テ惑  
ヲ解レ候ヘカシトイヘハ客僧我三十年以前此  
地ヲ過候時ハ制札ノ面僅ニ五ヶ條ニ候今日見







元仁なり平八とありと不動の末は合下返答後此  
秀吉平八の事多相く言方々天下の右相之何れを度  
知り多

徳川の士は是を右相を金銀を取ると  
小倉の足紙相別貞宗の振舞天下の右相は是の共言

を是く夫を右相と云ふに而も其情を其徳を打言本  
貞宗の刀と云ふるに早速後松へ歸りて縁後と云はれ松

と云ふ中依り毎人後松へ歸る

右の足紙々表とも多き人々の初奇の事一續保後

一はは度々ぬきも反りしとの奇と云ふ小倉の事小倉の

名は百枚足紙一月一と云宗朝中島へ遣来りて勤

中島より宗朝へと云ふ一と云宗朝辭退りて片く其片

中島へ歸りあり一と云後鏡打のせり鏡夫之宗朝方の片くと

後く終夫して是今日の事と云ふ

秀吉々去るの室へ月より夜家樂の機を云ふ

信玄の居館の松もて此の形斗にテニと云ふ

是の事と云ふ

是の事と云ふ

此の事と云ふ

酒井廣波の事

の事と云ふ

の事と云ふ

の事と云ふ

の事と云ふ

の事と云ふ



二階門なりカブキ籠なり夏の花の彫物なり二階門の上  
欄干五十六羅漢の彫物之友候門の口を関てと云と並流  
ゆりの果しとく藤生氏といひ也

辰く法梅をそとれ法圃より石をそとる法福寺の  
さき石をそとる一石の機中を鳴らす一付由より道  
し中より地下の口をそとる一石白飯の石物をめさるる  
合いより後藤氏の石を妙法院の宮内庭よりそとる虎石を源宗  
の法苑よりそとる虎の形の石を

續園誌

要洛の機を籠せりひく後祝儀として大小石をそとる

法士の思慮をそとるありとる石佛可なり市より作せといふ

誰くとも其地返言をそとる及中け上清子孫の神徳常不可

際限中との言上は時下殿や仰たるそ天下大治治り大坂

ホの石物を籠せりは誠と誠然一我身の本を極めは

上る世中よりそとる命の終りを得斗は信

せよ一辞世一首とよめやとて吟よ

を海と海方と消ぬる我身より那那波の事と夏の又夏

大小石願作天國口すとつく

秀吉要洛より清浄居居の彫物深田宮つとそ女より梳洗きそ

しとるしとく行福せしとくかとも其後なき不し秀吉

ゆえんとしとく内庭ありとく化粧のふるとそゆりよとそ



退く為き之乃水引せしんを天下の流大石の中付梳猪也  
とて可く之と荒く友行を去る宿惱忽平治すと云

先人雜話  
相葉長者多大岡の小世新ひなき養少年之大岡或付人なき

おしくをく唯の日須男をを好むと云ふは故昔物の思ひ

とむは大岡宿多子汝の姉と云ふと長者教ふらきゆ

なり

柏寄物語  
四月十日秀吉の内株 朔日昭夜無市出立内無流津野津流

宿田九道持監津田津田 伴友を節在集の御門候之文

續田談  
け伴友多け度演松の内親と云 市希標出幼少の時礼を進上

中の女房丸の子息は津田の節在集の御門候の中川入道と云

兄弟子そ人宛又子に人味方と系合戦の時 家康公

市平公子生梯系小平をの組よるを子孫山小を傍安友

常力丸山市を傍物持かりけ中の津田長門守と云は常力丸

お是之元禄三年十二月廿三日味方と系合戦の時を長門守

の弟と云十二歳之大岡夜樂伏見内業死の時物殺者の

二人長是越中守津田長門守之度長六年の後よ

家康公御代よ幼か茂の系よ欲群汝織田五つ稲葉甲斐守

天野因防津田長門又誰か人々大勢町人の女房の益と云

をして 家康公御代よ御版をよと有樂と信長の

合衆之乃ハそ子成れ是も信長よ免一 切腹を御免に成







五市家老元市目見五

長九様市小姓十五人宗良

酒帷子一ツス、シスリハリノ帯生括り市走者ノ

若列布の帷子一ツ先よらる是 却白標ノ市去履二列

布々平野ノ八様毎年五ニ市用ノ布之尚附ノ懐き者三

八様ノ帷子々不着

朔日標々随ふりり市人ノ市換換もりり此秀者ノ密ニ

不レ市若骨ノ故ノ却白標ノ

續開談

三月ノ市祝ノ市能能波魂世ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

山科源ノ市連々運水ノ市ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

不レ市若骨ノ故ノ却白標ノ

は次大會ノ市能能波魂世ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

不レ市若骨ノ故ノ却白標ノ

の火ノ番ノ元ノ物ノ中ノより出く採清ノ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

日常ニ番祝ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

浅野ノ市能能波魂世ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

不レ市若骨ノ故ノ却白標ノ

登ル市能能波魂世ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ

不レ市若骨ノ故ノ却白標ノ

二全別久ノ市能能波魂世ニ市ハ此ノ馬智ノ根ハ



興次郎大鞍安井信市是を多るうと之尾長信雅公の  
元はれも 御意は遠い 家康公を頼るや

系りゆはてゆ系仕る根之長命勘在馬の共相人相成  
即次郎柿原忠市大和を平しく是は一塩の幸き下も  
長命之と大倉甚いおわりゆは付大鞍室中彩七是と若き  
者之連大長或々地祝系良の町人三人おわり一人を宗匠市と  
覚ゆ二人、名ど失念仕ゆ小鞍甚し市也市入道伊集里甚長  
後吉山景忠と云は付お改ゆ 台徳院様二歳の市時  
ゆりゆはゆは小鞍市誓古之流川伊予小姓と仕て天正十二年

尾州信濃はと流川小を公流川半原の流松(系)ゆは細い  
市高家のゆは後移集甚きゆは物申ゆはゆはゆはゆは

初は、市長様、市景様市吉子ゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
酒井ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
附在馬の尉平八あ人なゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
園白秀吉と作ゆ我おゆの 市長殿小姓はゆはゆはゆはゆは  
有ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
房の幸ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
二松平ゆは十殿三長吉川ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは  
和泉六柳系ゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆはゆは



小幡徳子代付次の小幡亮ハ一申根あるニ植村久を二  
治助のひき長政のちや、五神虎のちや、六水野のちや  
七尾赤子代ハ八尾多むの代九加夜而入道十大野のちや  
十一村願の仙十二赤村伴勢子代十三竹尾の代松十に島津  
子松十を幕舎切可也同明孝阿孫也基五人神虎の文也  
をよつて二岩子代三浦子代付外赤舎付内神音の文春  
阿孫也人を赤良晒指席の常初の小幡亮の如く次を啓  
若狭白布帷子一ツ宛たり

青に章也

右より... 観世与三郎 逆水 亮三郎 左丈 兼以三 知三人 在百三出

昔中幼少の附騾阿府中少く勤在馬相云幸孫治席  
相云伴強又左馬相云三人なる大車之官増は左馬相  
云の批打一三人の内勤在馬ハ亦新相云とりあてし  
相云右に人の勤在孫治席右三人の勤よなるもよこしは  
あくの地相云と中とのあてしに元の道具はなるも  
少し是なる記中の中けは中持のあケ國ととあ三席 秘多  
勸進能はり少く福玉くより記兼三次席治席入道く少敬  
長命勤在馬の相云各席者候とく根子与三席治席心  
唐尼仕候よとく治出面白かりて治のくもハち更候



能の仕舞を始先諸藝塔地下柳りとは是のつるを宗  
多樂くの中よけ候を長君目よ下候りて天正九年  
清和を移りしり内志攻与三帝勸進能仕三列吉田  
に日二下同列新城ありに日二下遠列見方ありに日  
越川ありに日二下遠列着候りてに日二下遠府ありに日  
七三甲列府中ありに日八下同列於月ありに日八月初  
甲列於月ありに日八下  
柏寺物語  
神系少平を一日頃出立亦六日京看是る由候儀あり  
由使之西田友進將監宅へ到着之又為りて初申よ秀吉

此系相見老 城の東川邊にて相見候。此系一故あり  
きりしききりしお牧を陣めて我おを急送せりし

信雄より送る。おの極子も時を我おを腹りして  
少平より首を捉まればおのきりて今ありては秀吉方忠良  
感入りしけ友妹の事何角を居候。おは白後も

新入りし中  
續困談

柳系康政上洛せり先これハ秀吉密に彼後者西田友進  
将監宅より事候せり。此月ハ燭見の付ハ昔於柳の妻  
持家より立烏帽子と有奉一具ありて面白く支りて  
對面す。此の極よてお申極よ懸念を承りておの老  
候りしこれハ果して右の妻持家立烏帽子ありて對顔せり







を相副沼田如之見の毒城を致しより夫より去り上田  
表由加勢致させ可申と之傳へ今由加勢を志田城に  
類なり。家康云由加勢を致し上田城者の水  
條及より大軍を以由加勢を致し成り上田城を志  
中より致させ上田城に致し上田城を志田城に  
去りし上田城に使者今上田城に退治し上田城  
し上田城に致し上田城に致し上田城に致し上田城に  
急と角とそえ上田城を居し上田城に致し上田城に  
秀吉也 神若由より上田城に致し上田城に致し上田城に  
八月七日由加勢の積り上田城に由加勢を致し上田城に  
八月七日由加勢の積り上田城に由加勢を致し上田城に  
秀吉也 西國征伐のやうなるなり  
同年の秋相模に総督秀吉は権あるの月とて因り  
大坂を去りし上田城に致し上田城に致し上田城に  
秀吉也 相模に相模に相模に相模に相模に相模に相模に

柏奇物語

落穂集







家康の顔心の解中へ取寄る有る後、中より八月府  
々贈雅な小是る由む成思旨付より感心して退上

神君物語

神君の十六日甲列へ出ると成相撲を申見お成知く

秀吉より書状系懇懇と左連の尉と申送付とハ  
大政副を可成裁る何年中上洛を願ふの意也

八月廿六日秀吉より自筆 神君へ書状了る築紫へ  
可り由申相談申免濃造と申出可り下若又申上洛

張下ゆり印付又實成を可示との願へ申自筆あり

後此信甚基由致附人 山本秀吉等早速上の方へ申

八月申旬、家康云申申國へ申成心へあつたのち、秀  
吉飛脚を申致し、酒井左馬尉殿申披露すか、の如

夫よりあつたは、八月廿六日又飛脚秀吉の自筆を以て  
来年築紫へ出馬是れ付得申急為事、申免濃造

見牙の儀り、申急造致し、申見申成ゆり、印付示す

今の我、申急造も、信長との元来、清宗の如

今、我、申急造も、信長との元来、清宗の如







ラルヘキ由ヲ約セラシ盃酒ノ與アリシテ深意ヲ  
示ル六月廿二日從四位上左少將ニ任セラレ景  
勝ハ廿八如是日神君ハ色介詣テ上洛ヲ願ハレ  
二ハ最ノ事也  
柏寄物語  
神君駿河の市經營者ト傳フヤ市ニ入ルハの儀  
有リ

駿河ノ市入先市用有リト是後ノ市入海野孫多傳付方  
ハ家子孫ニ傳フ事トテ大政所を人質トシテ裁トナリ  
大和申納云秀長殿を立大政所人質を成海ノ市ノ  
服權也ト云ハルハ申切テ裁トシテ秀吉ハ大功ハ細權  
ノ所顧トシト斗ト斗ト云ハルハ申切テ秀吉多ク大政所を  
トシトシ同申家老の内を人質トシテ裁トシテ申切  
十月二日秀吉次奉りテ神君權申納云トシテ裁  
秀吉ハ大和臣の國白也物合々海野ノ秀長ト計時  
納云トシテ神君是後より海野ノ市入トシテ裁トシテ  
吉田ノ市入トシテ是後申家老中申大政所を人質ト  
シテ裁トシテ申切トシテ秀吉の事好々云トシテ裁トシテ  
在云々トシテ神君トシテ市入トシテ裁トシテ秀吉  
繼義を以テトシテ大政所を裁け上洛是云々トシテ秀吉  
恐々トシテ云々トシテ裁トシテ申切トシテ裁トシテ



十八日大政所池裡附く系系相平之及依池裡附の本陣  
成経言十九日逗箇亦日号傍へ系系相白録も由出傍  
母子の由事由依由つ海へ池は極子也是より何進も  
業集すか

落穂集

今日十八日大政所号傍へり着の台お支りり月於被池由為  
池は成支りり由と上系へは程忠言をん 濱松の由成を  
所發駕持りし由依りハ由多忠勝柳宗康政酒井忠徳高  
居是忠永井主勝そが安於吾在是の西尾隆成も牧野  
隆成も在り石運大政所り着方て号傍由成申り運返

の日の由ら由りハ井保由成申り多他在是の重次由人由り  
付少由小他在是の柳ハ由成へ由出 由成録より大政所

由着身有次由りよふへ 由上信て由程との由事不  
純り子細ハ上方節は 内裏上中の年あり此ひの  
のち何程もあへり由ふ山得たも秀吉令 勵務を歌き  
中何者をり大政所へ由附りり居りり 由中き由り  
雖斗ハ 由業録を先へりりて秀吉令の由由成をん  
由この由は由中よつ人も由由成の由由成をん  
由方別をあへり由成の由中よりり 由家康も由  
理りり由由らりりやまどの由成大政所り着の由後  
あ三日よりり 由是よりは濱松より由入の由り由成







おぬりぬり常田又左衛門は三ヶ國総も加賀越中の大國を  
あし業あり左衛門は八尾尾の御くちにて信雅も内より一町  
庸生飛騨堀之を常長吉川を常田郷田源吉け信雅  
内へ合せ折廻を以てわくのよきこと

家康云十月廿日の使三列吉田より来りて多助か捕只を人  
より終下市院密の市飯右尾後信雅を始の上り吉如  
斯いぬとも吏を便りぬはる 家康あてハ是なり

あし又大事を秀吉はるると思ひり

柏崎物語

系城を市焼拂おされ左寺へ市飯就可も信雅をいり

あし市飯を常田へあきし市飯を常田へあきし市飯を常田へあきし

より妻あきし市飯を常田へあきし市飯を常田へあきし

一徳をそき方へ市飯の一万余人二千徳と致し一酒井

左衛門尉柳系少年を八市飯より信雅に合徳一万を常田

の市一族なるとの市飯下のかよき事をも二千徳と致し

一信雅をとり常田へおし信雅は信野の目野へ出陣回

出陣一信回を焼拂くは川下へ角力の者ともあり

けものたに居候しと業田おきせ浅形を越膳助へおき

年武田勝頼長篠のをりけの信と想をりて柳系一榮と

赤碓りおきしと八坂田と此を信一少年を八尾尾尉

う一万女をりて御山のなると山のとて押上り右合に千徳を



初申并を焼立よたつゝハ秀吉大佐へ可成るの取誠体勢  
にあり大坂へ可出其時連討し彼一りり秀吉を桂川を  
い敵させし一々中乞くけ事一由原意也

續閑談

尚正月ゆの寒敷み多國あり一呂子之け月一萬二千のけ後  
連登り又二万あり多所去大坂の保七席去馬平定七一物  
け三人の侍大将よお海一押ありとて中村大右衛門後  
ち子孫八命又子よ中村ハ 別名指八甲別名保ハ  
後松よ立経  
秀吉母を是も中多後書同孫八命中多後左馬一御  
り一後松尚と居る石川日向と中乞く一 家康云御微妙そ

二月秀吉より一而奪り人あり正月申中東身政より一而討面

而高家の中系取持の國境目是なきや一とけ所上諸を思はし

か一の如く一之字雲彦代長 初登所  
後武蔵 一より氏並とてあ代の家  
藩代亮多一他國より次くお守り秀吉を五年の夏才是或  
き果報也一城より大名内の者を皆侍者之持一而一け乃理  
を 家康云而積り天地人の而す也

○國守のゆ大極位なり ○谷神のゆなり伴の如く一

武徳成業卷之二十三終



武徳成業卷之二十四

伯耆守加藤正脩編

落穂集

女一男湯上京此為丸島湯を湯立は極く湯引くを中  
 能左邊の若菜志志とて若菜志志とて若菜志志とて若菜志志  
 也よ山の如く積まざるをんを中言行を法ぬ一是言也  
 何半中と申合看中と申井修直政何公はぬ何何の葉形を  
 何の為の湯入用小の也と申中方向舟は是直政言入らばはる  
 お候お言て不存事と申と申直政と申直政の湯持姫と申  
 直政の湯持姫と申と申直政の湯持姫と申と申直政の湯持姫  
 と申と申直政の湯持姫と申と申直政の湯持姫と申と申直政の湯持姫

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 湯, 直政, 湯持姫)



次有出の事なきは極くもきく極くもよき事なり  
某朝の後に今方於大坂

御事等荒り給ふ程に多き程に積重たる某朝と志く御事  
持うけ大政所と初魚中とを焼殺し一すこの向の如く  
御事等荒り給ふ程に多き程に積重たる某朝と志く御事  
手寄女中と政所の事と一すこの向の如く

魚中討の節は事と志く

女一日尾高御事と志く尾高佐雄は御事等荒り給ふ程に積重たる某朝と志く御事  
被中身と志く山の程は御事等荒り給ふ程に積重たる某朝と志く御事

二下之方二日事なり

慶長六年直政算輪十三万石ヲ改佐和山六万石  
ヲ加ラル所替也 神君秀吉公ノ母ヲ人質

トノ預上浴ノ節大久保忠世本多忠勝ニ命玉ヲ  
吾レ上方ニテ變有ラハ大政所ヲ焼殺外ノ女中

ハ上方へ可返由ヲ命セラル取ニ直政下知ノ母  
公ノ旅館ノ廻ニ萱ヲ山ノ如ニ積上夕リ秀吉公

ノ思定テ秀吉公へ可申遣サラハ吾  
君無恙還御可成ト如是計ケルトナリ大政所歸

御ノ后吾身ヲ焼殺ヘキト支度ニタル直政惡キ  
男ト類ニ凡ハジキ有ケルヲ秀吉聞給アツハレ











是為入りて云事ハ徳之朝日の有るは是時後を止ぬ事  
と云事ハ外種く事古産肉をく明か時を妻向小我目意  
く少敷の中通宜敷好徳大石 徳川殿子人阿の通とあり  
極く事好中と事好くあり 神君を天子の極より如  
秀吉も陰分悪幕ハ事り事好く事好く事好く事好く

お事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
馬帽子の事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
極く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
お事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
お事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く

行と流一仏殿 神君の正様子を見え益敷のふまへ  
落穂集 神君大奥入御

家康公大坂の城より事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
家康公の事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
家康公の事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
家康公の事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く  
事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く事好く















大和太納之殿に 家康公御沙格を重く白紙子乃

沙羽織紅梅の裏沙襟袖先赤き地ノ桐原系前着白沙黄

色ノの縞のまね織是と痛生飛洋も第三十二歳着尺柄紙子

と申し子ゆら右の御織と秀吉公を大和太納之殿に御膳を

の御入給成事と御格之上し正産を別形の如く正倉より

此是の由よ 家康公御沙格(沙田尺柄)沙襟乞は秀吉公

此よりして沙系と立立るこころ沙服乞は終大和太納之殿

沙野陣正秀吉公御沙格よりよ正産より 家康公御沙格

我亦有人とて正役を凡披し申し留秀吉の衣に紙子沙御織と

亦亦よ沙の如く沙野陣正秀吉公御沙格よりよ 家康公御沙格

大和の事よ未だた取事正産ありと出格格より大和太納之殿

と秀吉公の御帳よりて正産を定てけ御織と秀吉具是れとの御

かゝる作のめら何様と申し是を先給送しう作の如く

と是是の御織よりて御帳より家康公御沙格の御帳より

と申し 家康公御沙格(同通)と是何様と申し沙格の御帳より

家康公の毛利一門長年守りて一新幕夫に由中因士皆一前正

御帳より御こころ秀吉是は何と申し是を御帳より石田治政情

情同古邊村大臣刑部之入りて御帳中小沙服は後沙田見は

是かこころとて秀吉は作は毛利は石田と始皆ありと申し



家康の事

家康の事なりし事以各書に於て之を

備へし事

家康今日之事は小袖とて事成りて後日

おの事とて一は眼をてて一府家とて敢て思ふ一と此世の

小姓元とて事く事と大和入納之殿御野澤正三郎

家康公

御前夜とて事いもの小姓元渡り一は役とて凡概也

家康公御前

と申し紙子の御殿とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

御殿とて事成る事なりし事御前夜とて事いもの御前夜

家康公御前夜

の御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

家康公御前夜

小具とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

時小説自身

家康公小具とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

家康の事言ふ事いもの御前夜とて事いもの御前夜

秀吉とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

いのは是れ何れ御前夜とて事いもの御前夜

事の御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

各事御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

家康公

説は乃是れ御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

家康公御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

佐治あ人小具御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

衣を御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜

人小具御前夜とて事いもの御前夜とて事いもの御前夜



家康も秀吉も是を著るを収と視て致しき事しかく此  
ふもよと秀吉の降先小指実と云ふ所は五妙法能業九箇  
しつ十日此間小島國領

柏奇物語

大改新と云く五返宗井作を初を此洲と云く之今若又此見也  
重く上京の時此を原を掘りてを浮田宰相御殿と云く此也  
秀長の原を後ろ合せしは秀長此家老と云く此家老は秀長を  
徳川殿御指折其合をて進と黄金皮袋と云く此家老は御指  
御殿を此は此合と云く此御指折一右衛門と云く此御指折は此  
黄金合と云く此

世後此を京に於て此の原と云く此原場十石と云く此原と云く此原  
及て此原の此原と云く此原と云く此原と云く此原と云く此原

しそい原一石と云く此原と云く此原と云く此原と云く此原  
あるは三百石と云く此原と云く此原と云く此原と云く此原

料も此原神原中此原も原也此原 橋原と云く此原也  
橋井之雨乃此原

右此と云く此の園白秀吉の御指折也此原也 家康此原也

付此原の此原此原と云く此原と云く此原と云く此原と云く此原  
貴物と云く此原此原此原也

柏奇物語  
此原此原此原此原也

此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原  
此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原此原











落穂集

同年十二月

家康公渡松平後府に城入り移り兵糧別

今自六及月迄は皆御家人の御手本表し御手本表し引移り

板江作出由

柏寄物語

西國渡り法士と法めり。是の年出陣のより度法政三十七ヶ箇の

軍勢と法僧人数亦万余りと信公に糧米二十万人の用意を任じ

之に用意を致し志の手中乃糧米あり

神君渡松平十月日渡府より御手本表し保新十郎一人移り

月旦夜御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

佐与子御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

佐与子御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

長尾様御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

大橋ホウカイ

續副談

仙石秀久去年潜居し御手本表し今年十月大友平統三救し

を渡り御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

吉実初御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

直我西國下向し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

と御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し御手本表し

柏寄物語

天正十六年



























モ六尺ニ成テ出タリ六尺ノ出タルモ兩人アリ  
是ハ皆侍ニ被成候

薩摩陣ノ時伊集院幸侃大閤へ内通仕ツテ義久  
ハヤク降参ス依テ薩摩庄内領八万石朱印一テ  
幸侃へ賜ル其後中納言殿代ニ伏見ニテ少科ノ  
事ニ幸侃ヲ手打ニイタサル幸侃ハ石田三成別  
而挨拶能モノニ幸侃ヲ卒忽ニ成敗ノ事ヲ大  
事ノ儀ノ様ニ中納言殿工ウラミノヤウニ申サ  
ル時ニ中納言殿高雄へ参詣  
權現様キコ  
シノサレ用心ノ為トテ伊奈圖書ヲサシリヘラ

ル圖書三十騎斗ニテ警固嶋津家此等ノ御意入  
辱被存ノ由サテ幸侃子ヲ源次郎ト云庄内ノ城  
ニ籠テ謀叛翌年落城源次郎伏誅其領知ヲ中納  
言殿并領

有馬修理大夫へ薩摩ヨリ加勢ヲツカハシ候時  
兄ノ兵庫カ第ノ中書カ兩人ノ中ヲツカハスへ  
シト立伯タツ子ラレシニ新納武藏進テ甘ハ兵  
庫殿ハ耳臆病目 甲々敷大將ナリ中書殿ハ耳  
甲々敷目臆病ナル大將ナリ目ニ見タル時大事ニ  
存ル大將ハ軍ノ仕損シ十キモノ也必中書殿ヲ



被遣可然ト云テ終ニ中書ヲ遣ト云ク兵庫後ニ  
少々新納ヲ恨ム新納カ云何程御恨候トモ私存  
ヨリハ其刻申タル如クニテ候サテ中書三千人  
ホト召連レ有馬へ越有馬ノ安徳浦ニカクレヲ  
ルサテ森岳ノ山中ニ伏メ龍造寺へ先手トヲリ  
過テ旗本ノトヲル時分伏兵ツキ出隆信ヲ打取  
候トリテハ薩摩川上左京ト云フモノナリ修理  
大夫伯父有馬越中ト云モノ船ニ三艘ニトリノ  
リ海手ヨリカ、ル此時龍造寺へ此舟ヲ肥後ノ  
棋下ノ侍共ノ味方加勢ニ来リタルト油断不夕

シ居タリ越中ヨキ圖ヲ見テ鉄炮ヲ打カリ是ニ  
コトサラサハキタル處ヲ伏兵森岳ヨリ突掛リ  
タルトモ云々肥後ノ赤星ト隆信ト中アシ、有  
馬氏ハ赤星ト一味也依之隆信ヨリ有馬ヲ攻メ  
ルヨシ

武邊咄聞書

之祀宗系編年ノ事ニ詳シク稱シテ高祖云々方々之祀乃電此  
詳シク述ビテ其時科人ノ名書有リテテ自討せたり不レ此處  
れを子孫傳フコト也此レ也胸道者も入レ見ル事一トテテも  
跳初せん傳フ名も此レ也夫々ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事  
この千態守之傳フコト也此レ也夫々ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事







幼く由若澄の使と小村新を遣彼時より重一宰府の方の山下城中  
通舟海表へおくと云々是より大将紹雲甲冑と名一長刀持せ  
出向ふ口と云々是との市使涉路志石濱市使と城中へ招入詔乃  
骨とも休え云々を度いれり合修しと云々何の具と云々  
一五海系ありと宣口云々和しと云々海一船なりて海攻を呈  
い紹雲終よ切て出命林河と云々為一掃一息  
初と後秀存九列後向の時秋月と紹と使使と修くく判付  
物と云者紙指せしれり懸刀唐指しと秀存云一自身往て海系  
主程実小中りら今意殿下の涉路何十方路と云路ありて田中  
と云者一海系と云一九列の諸將を使使ありと云路譯あり判  
ありと海譯ありと云一海路系あり可和と云一和種実種長と云其に  
同者よとつと笑ひい汝の徳病う又其好報を其たれおれん種冠者  
下殿の者何種の手事と云一苗家と漢の云一祖人傳りら云と云く  
と云者く種八町坂ある大切新日本唐云一と云く其者あり何系  
事の何と云と各一と云一と云一和種実種長と云其の事と云  
と云一と云一苗家乃運もか一と云一と云一由今見ると云一其  
今而一和もい何一と云一と云一其者種と云一と云一と云一  
後と云一其早也初て秋月八幡云一和種実種長と云一其者あり  
従つとの涉路之坂並古系と云一と云一其者種と云一と云一其者種と云  
定生と云一和種実種長と云一と云一と云一用と云一和種実種長の











ニカヘレ兄弟共ニ此ニ在者ハ一人歸テ父祖ノ  
姓ヲ絶サレト下知セラレケレハ皆此詞ニ感シ  
テ三百餘人共ニ戦死ヲ遂テ主恩ニ報スル時十  
リト奮發ノ氣色アラハレタリ遂ニ薩摩ノ師ヲ  
望ノハ馬烟天ヲ掠テ推来ル城兵ヲソル、色アレ  
ハ從運衆、向テ盛ナル哉薩摩ノ師我コレヲ考シ  
今師ニ從ヒテ此ニ来ル者六十以下二十以上十ヲ  
ン彼戦勝テ我悉ク討死ストモ彼モ亦三四十人ヲ  
過スシテ同リ原野ノ白骨トナラン人主ハ朝露ノ  
跡ヲ待カトトシ義心ノ此ニ後世ニノコレ昔友敵

リタエサルハ武士ノ願フ所ナリトカヲ添フルレ  
ハ城兵ノ勇氣十倍セリ從運其勢ヲスカサス三百  
人一手ニ成テ敵大軍ニテヒカヘタル真中ヲ突ク  
リ左右ニ切ナヒテ縦横ニ馳ミタシ斬刺七八回薩  
摩ノ師其死傷其数ト救ヲ知ス從運始ヨリ必死ト  
思ヒ定メラレタレハ士卒誰カノフルヘキアルヒ  
ハ敵ト鎗ヲ合ヒ共ニ貫レタルモアリ或ハ首ヲ膝  
ノ上ニナラヘテキ重創ヲ被リテ自喉ヲ截モアリ  
三百人ノモノ一人モ逃走ハナカリケリ從運ハシ  
メ圍ミテ受ルトキ一人ノ兵士ニ命シテ五花ニカ























しよと申付て秀吉に上りて申す

叔父村部宗元郎知事之旨に依りて不承り申す所

不承り申す長崎城に上りて瑞穂と申す所

申す所も申す

七月一日秀吉海路に寄平定版に承りて申す

叔父の八代知事に遊りて使事と申す

小山藩長沼小田作行の旨に承りて申す

可)

秀吉に承りて申す叔父の旨に承りて申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す

申す所も申す















よし今此遠州高取村に居りて夜に丹波の赤坂村より  
不意に之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に  
言ふ事ありしが御殿に下りて居りて夜に御殿に下り  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に

九人難語

大岡始末の事と云ふに凡そこの事久しき事ありて  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に  
言ふ事ありしが御殿に下りて居りて夜に御殿に下り  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に

柏寄物語

此の事と云ふに凡そこの事久しき事ありて  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に  
言ふ事ありしが御殿に下りて居りて夜に御殿に下り  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に

此の事と云ふに凡そこの事久しき事ありて  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に  
言ふ事ありしが御殿に下りて居りて夜に御殿に下り  
りしに之に従ふ位下るる事ありしに赤坂村の御殿に  
依りて居る時と云ふに之を御殿に下りて居りて夜に



惟卷一のりて之 神君の言 清江村の村...

十二月のりて之 神君の言 案は...

先づ之利鎌を免角梅葉の久...

武藏國談

天正十五年 吉原 吉原 吉原...

流大谷町人 流大谷町人...

上月利鎌の石燈籠 上月利鎌の石燈籠...

月之利鎌と石燈籠 月之利鎌と石燈籠...

入茶道の物教 入茶道の物教...

天下のりて之 天下のりて之...

生駒官月少補物 生駒官月少補物...

月三分て 月三分て...

流之物 流之物...

十河氏初太補存保 十河氏初太補存保...

戦死す人 戦死す人...

流及入初の時 流及入初の時...

主後干松九太 主後干松九太...

流及入初の時 流及入初の時...

流及入初の時 流及入初の時...

流及入初の時 流及入初の時...



叶始子之生約之甥大塚宗女十有年平松九十三之能成也  
入湯洗如大塚子之志無干松父之有者教之能養育  
二信之生約之伴渡依之形之石解の地生約の世成行  
家中祝美事之生約叶之世也下之先毒殺也の  
早也平松養祖父十河一存之紅光才之三好之族の英雄  
父存保常武之正家之持守保美之世曾之孫心正意細川澄元  
抄渡之教之之教の為人多し之世也下之先毒殺也の  
殺し之世也の教也

武徳成業卷之二十四終





